

常葉国文

第 38 号
勝山博子先生御退休記念号

勝山博子先生業績目録

〔寄稿〕

勝山先生の透視能力

..... 小野田貴夫 (1)

勝山博子先生御退休記念号によせて

..... 宮本 淳子 (3)

〔論文〕

『注文の多い料理店』への入り方

..... 小野田貴夫 (5)

近代沖縄における字書利用の一例

—北谷町教育委員会文化課蔵『四書體註』による—

..... 中野 直樹 (27)

エピグラフ(引用文)のコミュニケーション・ツールとしての機能性に関する研究(3)

—アイロニーとしてのエピグラフの効果と意思伝達上の問題点の考察—

..... 那珂 元(左25)

短大におけるアカデミック・ライティング指導とその効果

—ルーブリック評価活用の観点から—

..... 勝山博子 宮本淳子(左1)

〔紹介〕

和泉悠著『悪い言語哲学入門』

..... 高田 樹 (51)

篠崎晃一著『それいけ！方言探偵団』

..... 沼野 綾里 (53)

木宮泰彦著「概観日本造船史」の概要

..... 若松 大祐(左40)

卒業研究題目一覧 (100)

雑報 (103)

編集後記 (104)



勝山博子先生近影

勝山博子先生業績目録

ビブリオバトルにおける双方向コミュニケーションの有効性『常葉大学短期大学部紀要』(51)
二〇二〇年十二月

「プレゼンテーション論」におけるビブリオバトル導入の試み―コロナ禍における授業実践報告―『国文瀨名』(35)
二〇二一年三月

「書評」松下佳代著『対話型論証による学びのデザイン』学校で身につけてほしいたった一つのこと『草薙論叢』(1)
二〇二二年三月

高校「現代の国語」教科書の「書くこと」指導―ライティング指導の高大接続の観点から―『草薙論叢』(2)
二〇二三年三月

短大におけるアカデミック・ライティング指導とその効果―ルーブリック評価活用の観点から―『常葉国文』(38)
二〇二三年十二月(共著)

勝山先生の透視能力

小野田 貴 夫

仕事でイラッとするところがあると、まずは隣の勝山先生の研究室に行き、その愚痴を聞いていただきました。すると、いつも共感して「私もね」と、先生ご自身の経験をお話いただき、最後は「まあ、がんばっていきます」と笑顔で、自分の研究室に戻ってくることができました。こう書き出してみると、私に気を遣って合わせてくださったのだと思います。一緒にお仕事できたのが、本当にありがたい5年間でした。

心配な学生についてご相談すると、とても参考になる情報と助言をいただくことができました。勝山先生は、学生一人一人の情報や性格を、講義の様子や課題の内容から、とてもよく把握されていました。それはちょうど作品から作家の思想や意思を読解するみたいに、学生たちの状態を読み取っているように見えました。また現在の学生の姿から、高校生だった頃の様子を（水晶もタロットカードもなしに）透視する能力もお持ちでした。高校の校長を務めあげられた（いろいろな意味での）実績がなせるワザだと思えます。

勝山先生が、文科の教員になられたのは、文科が瀬名のキャンパスから草薙キャンパスに移転して2年目で、新しい環境での試行錯誤の最中でした。従来のやり方が通用しない中で、文科の新たな地盤作りにご尽力いただきました。たいへんご負担をおかけしたんじゃないかと思えます。

さらに、新型コロナウイルスによる緊急事態が重なります。卒業式も急ぎよ縮小され、入学式がないばかりか、新入生ガイダンスもろくにできないまま、事実上キャンパスはロックダウンとなります。そうした中であって、非常に限られた連絡手段しかない中、勝山先生は、一人一人の学生たちと丁寧に連絡をとってくださいました。私たちがまったく体験したことのない緊急事態宣言下のオンライン授業に向けて、その土台を作ってくださいました。文科は、他のどの学部、

どの学科よりも、学生たちと教員との緊密なネットワークを構築することができ、かなり積極的にオンライン授業を実施できたと思いますし、その遺産は今でも非常に役立っています。一人も取りこぼさないという姿勢は、勝山先生から教わりました。ある時、日文科内の会議で、なかなか連絡がつかない学生のことや話題になり、それは仕方ないと諦めるような雰囲気になった時も、勝山先生は、私に「いいよ、私が連絡するよ」とおっしゃってくれたのがとても印象に残っています。こういう姿勢は、日文科としても、私個人としても、受け継いでいきたいと思っています。

ご退職されることは残念ですが、これからも先生のご活躍を期待しております。新たな門出が素晴らしいものとなりますよう、心よりお祈り申し上げます。……というふうには、まだ終わりません。「食と風土」、引き続きよろしく願います。そして、これからも、私たちも見守っててください。

(おのだ・たかお 本学日本語日本文学科科長)

勝山博子先生御退休記念号によせて

宮本 淳子

日本語日本文学科の教育活動に5年間に渡りご尽力され、学科の運営ならびに発展にご貢献された勝山博子先生が、退職のときを迎えられます。勝山先生は、高校教諭の職を終えられてすぐの2019年4月に本学科に着任され、主に日本近現代文学に関連する科目をご担当されました。ここでは、勝山先生のご退職に際し、感謝の気持ちを込めて、筆をとらせて頂きます。

勝山先生と過ごした5年間は、私にとって大変貴重なものでした。勝山先生の授業に向けた丁寧な準備、学生たちの関心を高める仕掛けづくり、また授業以外の学生指導での的確な助言や先を見越した対応など、教員として学ぶべきことが数多くありました。

特に、日本語日本文学科とはいえ、近年では高校生までの読書体験が少ない学生も増えているなか、常に工夫を凝らした授業展開を意識されていたことを、時折、研究室に伺った際に机に置かれていた配布資料などを拝見するたびに、感じておりました。また、創作系の科目では、学生陣から提出される文章の添削対応に、おそらく相当な時間を費やしておられたと想像しますが、学生の個性を尊重しながらも、より表現力を高めていくためのアドバイスやグループワーク評価を活用した客観的なフィードバックにより、学生たちの意欲を高めることに注力されていた姿も心に残っています。

最終年度にあたる2023年度は、必修科目「現代文書A」をTT (Team Teaching) で実施することができ、それまで以上に勝山先生とお話する機会が増えたと同時に、授業の進め方について、側で学ばせて頂くことができました。これも、私にとって大変意義のある時間となりました。課題の提示の仕方についても、学生たちが順を追って、ハードルを越えていけるよう、テーマ設定の工夫を持たせるなど、科目の最終目標を見据えた鳥の目と、目の前の学生のその時々

変化を見逃さず臨機応変に対応するための虫の目を有する大切さを、先生の姿から、改めて実感いたしました。

また、授業以外の学生指導につきましても、一人一人の抱える背景にまで気を配り、慎重に対応されている姿が印象的でした。その丁寧さと、先を見通しているからこそのご助言が、時に学生への厳しさにも繋がっていたらうと想像します。「優しさ＝甘さ」ではないことを体現されている：その凛とした姿勢にも、見習うべきものがあると感じておりました。今年度で、大学でお目にかかれる機会が少なくなることは、残念ではありますが、勝山先生の今後のご活躍を祈念するとともに、今後も引き続き、日本語日本文学科の教育活動に何らかのご縁をもって頂けますことを願っております。5年間、本当にありがとうございました。

(みやもと・じゅんこ 本学日本語日本文学科主任)

『注文の多い料理店』への入り方

小野田 貴 夫

はじめに 目的と観点

5 『注文の多い料理店』への入り方

宮沢賢治の童話集『注文の多い料理店』には、九つの物語が収められている。そのすべてにおいて、人以外の動物、植物、自然物、自然現象、人工物といった、私たちの日常生活では意志表示をしない存在が、意思や感情をもって登場し、振る舞い、話す。こうした現象に、少なくとも現在の高度に産業化され情報化された社会における生活圏では接することができない。つまり、私たちの日常生活の認識や存在のモードとは違う世界である。これが、まったくありえない不可能なことであれば、幻想ということなる。ただし、これらの現象を、宮沢賢治が『注文の多い料理店』の序で述べているように「どうしてもこんなことがあるようではかたない」ものとするならば、そしてある種の条件下では可能となったり出現したりするものならば、それは、私たちの普段の生活とは違うルールや規則性で物事が

生起したり認識されたりする別の世界の存在を想定する必要がある。『注文の多い料理店』では、そうした世界が、それぞれの登場人物たちに対して、生活と地続きな実在的な世界として存在していたり、一方でいわゆる幻想のような仕方で存在していたり、またたしかに存在しているように描写されていても、登場人物には少しも気づかれないでいたりする。本論では、このような動植物、自然物、自然現象、人工物等が意思や感情をもって行動する世界が、どのように人々に対して、どのような条件下で存在するように描かれているのか、『注文の多い料理店』のそれぞれの物語において、検証していく。

対象と調査方法 入る過程、接し方、戻る過程の三つ側面とグラフィ化

『注文の多い料理店』は、九つの物語からなる。そのうち、「人」が登場し、動植物、自然物、自然現象、人工物が意

志や感情もって活動する世界、いわば人以外の存在が心をもつて振る舞う世界に接することになる作品は、七つある。その七つは、作品名リストの表1「人と人以外との接触」の「人の登場」の項目に○をつけた。本論では、これら七つを考察の対象とし、残りの二つ「烏の北斗七星」と「山男の四月」は、除外した。「烏の北斗七星」は、物語の最初からカラスたちが主人（？）公であり、終始カラスたちの世界のまま閉じている。そこで表1では、×としてある。「山男の四月」は、主人公の山男と、夢のなかで登場する「支那人」との関わりを通して物語は進行していくが、「両者とも、日常的な生活を送る人々に対しては境界的な存在であり、先の七つの物語のような人と人以外の心もつた存在とが接する物語の展開を持たない。境界的な存在という意味では、表1で、△としてある。

本論では、人が人以外に心をもつた存在と接するこれら七つの物語について、人が元いた場所を離れてそれらが活動する世界に「入る過程」、その移動先での人と人以外の存在との「接し方」、その後、元の世界へと「戻る過程」といった三つ側面から、特徴づけていく。そうすることで、同じ基準にそって、それぞれの物語を、比較検討できるようになる。またそれらが直観的に把握できるように、「入る過程」「接し方」「戻る過程」の三つの側面が一連の過程

表1 人と人以外との接触

	人の登場	人と人以外との接し方
1. どんぐりと山猫	○	相互に意思疎通有り
2. 狼森と箕森、盗森	○	相互に意思疎通有り
3. 烏の北斗七星	×	
4. 注文の多い料理店	○	一方的（動物（山猫）たちの意志に人（紳士たち）は気付かない。）
5. 水仙月の四日	○	一方的（自然現象（吹雪）の意志に人（子供）は気付かない）
6. 山男の四月	△	
7. かしわばやしの夜	○	相互に意思疎通有り
8. 月夜のでんしんばしら	○	相互に意思疎通有り
9. 鹿踊りのはじまり	○	一方的（動物（鹿）たちの意志に人（嘉十）は気付かない）

として理解できるようにグラフ化した（図1～9。ただし、図3と図6は、本論では、対応する作品を扱わないため、省略している。）ⁱⁱ⁾

グラフ化にあたって、物語制作の実践的な視点から物語展開の基本構造を示した大塚(2017)のグラフを基に、M.Joffe等(2013)の自由エネルギーの時間的な変化と感情価の性質を示すグラフの機能を重ね合わせたグラフを考案し、使用している。具体的には、縦軸は、「不確実性Ⅱ不安定性Ⅱ不安」としてあり、登場人物が住み慣れた場所や出来事を予測しやすい状態にあるほど0の値に近くなり、不慣れで危険性や不満が高くなるほど値も大きくなる。横軸は、物語上の時間的進展であり、物語の開始時は、0の値に近く、物語のおしまいに向かって値が大きくなる。Ⅲ

七つの物語は、すべて、人が日常の生活圏から離れて、動植物等が活動する場所にまで移動している。そこに至り入るまでの過程が細かく描かれている物語もあれば(例えば「注文の多い料理店」)、移動した結果しか描いていないものもあるが(たとえば「月夜のでんしんばしら」)、その場合でも移動の過程は暗示的に理解されるようになっていく。

その移動先で、人は、心を持つ動植物等と接する。その仕方は、大きく分けて二つで、両者の間で意思疎通を含む相互交流が生じる場合(たとえば「どんぐりと山猫」と、一方的な働きかけだけで意思疎通には至らない場合とがある(たとえば「水仙月の四日」)。それらを表1の「人と人

以外との接し方」の項目に記した。

そして、人が人以外の存在に接した後に、その変質した世界の状態が元の状態に戻っていく転換点や過程が来る。その転換点や過程、さらに元の世界へと移動して帰っていく過程については、その細かな描写がある物語から、結果だけ示しているもの、またその過程も描かれていないものまで、さまざまである。

各物語のグラフ化と解説

「どんぐりと山猫」について

「どんぐりと山猫」において、怪しげな姿と話し方の別当の登場が、別の世界への移行の完了を象徴している。一郎が別当に出会うまでは次のような経過となっている。

・手紙をもらった夜、一郎は、「ね床にもぐってからも、山猫のじゃあとした顔や、そのめんどろだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむれ」ずにいる。

・翌日の朝、一郎は、「ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行」き、疲労も加わったところで、栗の木と話し始める。

・続いて、滝や、白いきのこ、リスとも話をした後に、さらに進んでいく。

・道が細くなって消える。また新しい道を見つけて登る。かやの木が覆いかぶさり日の光が遮断され坂道がもつときつくなる。

・疲労感とストレスが非常に高くなったところで、明るい「美しい黄金いろの草地」に出る。

・山ねこへの案内人となる「おかしな形の男」である別当と出会う。

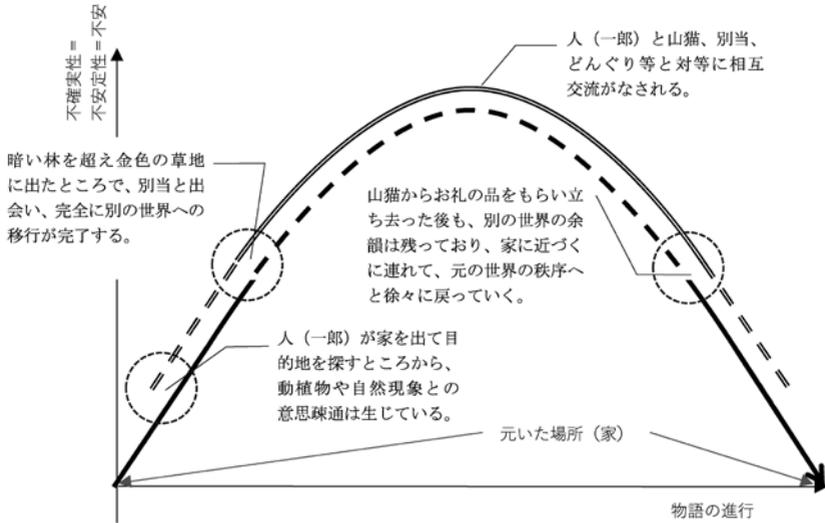
一郎が、栗の木、滝、白いきのこ、リスと話しかけていく姿勢は、ごく自然で相互に何か特別なコミュニケーションをとっているという様子ではない。この過程の後に、道がなくなり、新たに道を見つけて暗い坂道を抜けたところで、別当と出会う。

一郎のミッションは、どんぐり間の争いを治めることにあり、それに関連することも、それ以外のことも、一郎は、別当、山猫、どんぐり等と、自然に会話している。一般的に言って、動植物や自然現象と会話することには、常識からの飛躍が必要であるが、一郎にとっては、それが無い。そして、物語の冒頭で山猫からの手紙にある誘いに疑いもなく応えようとする一郎の無邪気さに、私たち読者も読書

体験のなかで、乗り移ることができれば、滑らかに、動植物等と意思を交わす世界に接続されていく。

一郎は、どんぐりの争いを治めた後、山猫等からお土産をもらい帰路につくが、一気に魔法（のような状態）が解けてしまうのではなく、家に近づくにつれて、元の世界に戻っていく。行きも帰りも、人の生活世界と山猫たちの世界がゆるやかに連続的につながっているような描写となっている。ただし、帰路には、往路に別当が登場したときのような劇的な契機はない。しかし、もう二度と山猫からの手紙が一郎のところに届かなかったことから、この帰り道は、おそらく一郎の期待に反して、最後の帰り道となっている。

図1. 「どんぐりと山猫」

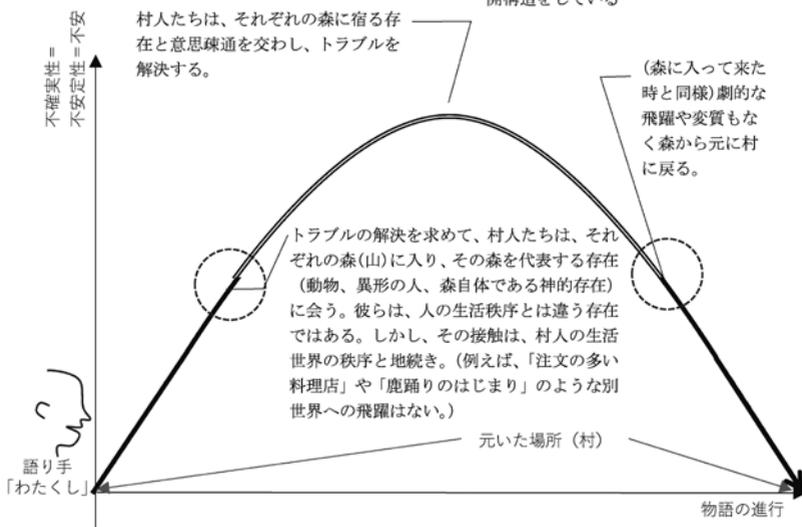


「狼森と笹森、盗森」について

「狼森と笹森、盗森」では、物語の始まりから岩(巖)が「わたくし」に語りかけている。語り手が、「わたくし」として明示されているのは、この作品と、「鹿踊りのはじまり」の二つである。

「狼森と笹森、盗森」の「わたくし」は、物語の最初から別の世界にいる。「黒坂森のまんなかの大きな巖が、ある日、威張って」、「わたくし」に聞かせてくれたのが、それぞれの山(森)の起源譚となっている。黒坂森の大きな岩(巖)が、「わたくし」に話しかける契機は、特別に用意されていない。しかし、「黒坂森のまんなか」とあることから、物語が始まる前に「わたくし」は、山の奥まで入っていったことがわかる。つまり、「黒坂森のまんなか」にたどり着き、その登坂に伴う疲労感や大きな岩に寄り添いながら自然のなかに独りで浸っていく感覚にある「わたくし」に、巖の語りが聞こえる別の世界が開けたことが、予想される。そして、物語のなかで、巖の語りは、そのまま「わたくし」の語りと重ねられて、大きく四つのエピソードを伝える。最初は、定住の地をもとめて移動してきた人々が、周囲の森からそこに住まうことの許可を得るエピソードである。その後、作品名にある3つの森のエピソードが語られる。

図2. 「狼森と箕森、盗森」



*最初の移住時のエピソードを省いた狼森、箕森、盗森の3つエピソードに関してのみ図表化した。この3つは同じ物語の展開構造をしている

この3つのエピソードは、図2に示したように、同型の物語の展開をしている。その展開とは、問題が発生して(村の子どもたち、農具、粟が、無くなる)、その都度、村人たちが、その原因と解決をもとめて森に入っていく、そこで森の主または森自身であるような神的存在(狼、山男、森(山)そのもの)と会い意思疎通を通して解決する(失ったものを取り戻し、代わりに子供えものをするようになる)というパターンである。

ここで特徴的な点は、村人が、森のなかへと入るという移動による環境の変化はあっても、森の主等が存在すること自体には、違和感をもっていないことである。村人たちは、子供や農具や粟をもっていかけたことには困っているが、ある種の意志や感情をもって接してくる狼や山男や山そのものの存在を、ごく自然のことのように受け止めている。「どんぐりと山猫」の一郎も、動植物等に対して、通常の認識モードのまま、大きく切り替えることもなく接しており、それは一郎が「子ども」であることの無邪気さ(と幼児的なアニミズム的認識様式の残存の想定)も手伝ってより自然に感じられるが、それでも別当(と山猫)等と会うときには、一段階違うステージに入ったことを示す描写があった(暗い坂道の先に開けた黄金色の草地)。一方、「狼森と箕森、盗森」では、そうした飛躍や断絶はないま

ま、森の主たちと村人は接している。そうした時代があったことを、語り手である「わたくし」であり「黒坂森」が語っており、同時に「しかしその栗餅も、時節がら、ずいぶん小さくなった」と森へのお供えものが以前よりも小さくなったと言うことで、間接的に、かつてのような森と人との利害関係と相即的な親和性や連続性が失われてしまったことが暗示される。

「注文の多い料理店」について

「注文の多い料理店」においては、「西洋料理店 山猫軒」の出現が、現実的な世界から別の世界への越境になっている。二人の紳士が入るまでの過程を追ってみる。

- ・二人の紳士が、猟に森に入る。
- ・案内人が迷子でいなくなってしまうほど山奥に。
- ・「あんまり山が物凄い」せいで、犬が泡を吹き死んでしまう。
- ・帰れるかどうか真剣に不安を覚えたところで、「風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごとんごとんと鳴る。
- ・恐怖と体が痛くなるほどの空腹が、襲ってくる。
- ・そこでレストラン「西洋料理店 山猫軒」にたどり着

表2. 動植物・自然物自体である神的存在へ接触

対象者	対象者の性質	動植物・自然物自体である神的存在へ接触
子ども（一郎）	未発達なアニミズムの認識様式（の残滓） ^{iv}	連続的・シームレス
農家（村人）	第一次産業のみの段階にある自然への決定的な依存状態	
都会人（紳士たち）	より高次の産業段階と（自然に依存しない）人工的な生活環境	非連続的／跳躍

く（突然うしろに現れる）。

ここに至って、二人の紳士は、レストランのなかで、扉を一つ一つ奥へ進みながら、その度に注文を受けることとなる。すでに見てきた「どんぐりと山猫」の一郎や、「狼森と笹森、盗森」の村人たちは、移動によって別の場所、別の環境条件へと移動するものの、その過程は生活空間と連続的で、動植物等といわばシームレスに会話ができる。一方、「注文の多い料理店」の紳士たちには、案内人がいなくなり、犬が泡を吹き死んでしまい、紳士たち自身も恐怖と飢餓感といった

ストレスが重なる過程はあるにしても、レストランの出現、そしてその中での転倒した注文は、それ以前の世界の秩序

から切り離されて、文字通り別の世界へと跳躍している。整理すると、表2のようになる

紳士たちは、現在の私たちと同じで、動植物や自然物・自然現象に直接話しかけることも、話を聞くこともできない。それも、紳士たちは、都会から断絶された山奥という自然環境で一方的に山猫たちのトラップに嵌められ、紳士たちの声は届かない。

ただし、そのトラップが、山奥にありそうにない西洋風のレストランであるところは、彼らの認識様式のなかにすでに、言葉話す山猫や山男や山そのものといった神的存在が、存在しないことも、象徴している。都会人たちは、恐怖の極限で退行的な認識様式に切り替わっても、山猫や山男や山（森）そのものは、話しかけてこない、と作者宮沢賢治は、想定しているようだ。

紳士たちが、山猫たちによるレストランの罠から解かれるときも、非連続的に元の世界へと急変する。死んだはずの犬たちが間一髪で助けに飛び込み、レストランは消失し、案内人も戻ってくる。ここも、子どもの一郎による「どんぐりと山猫」や第一次産業のみの村人たちによる「狼森と箕森、盗森」と対照的である。

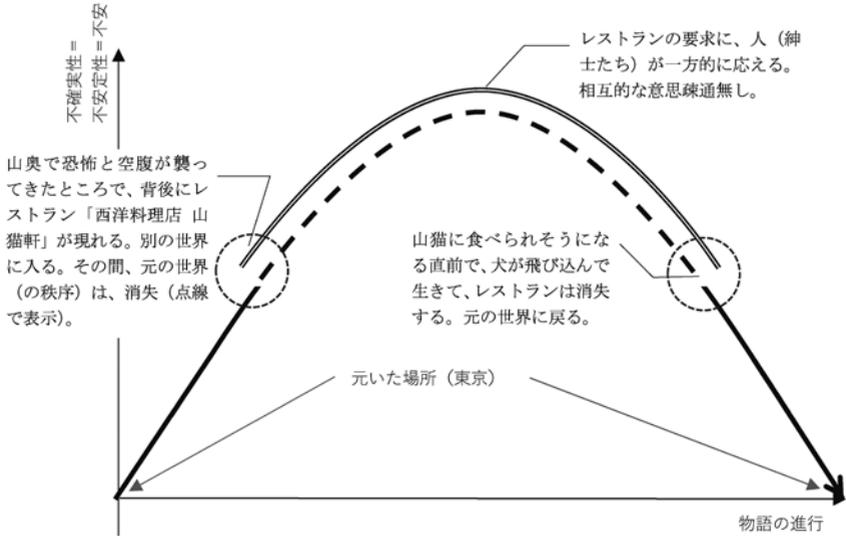
人が、人以外の意志や感情をもった存在の場所に「入る過程」「接し方」「戻る過程」の三側面を一連の過程として

記した図2「狼森と箕森、盗森」と図4「注文の多い料理店」の違いは、別の世界に移行する時の認識モードの変質（跳躍、飛躍）の有無であることがわかる。図2「狼森と箕森、盗森」のほうが、元の世界から別の世界へと一本のラインでつながっているために、形状的にはシンプルであるが、現在の私たちは、こうした二つの世界が地続きとなった認識様式をもっていない。むしろ、山猫が罠を仕掛けるような世界が組み込まれた物語の展開としては、つまりフィクションとしてのものもつもらしさを備えた物語の展開としては、別の世界への跳躍を含む図4「注文の多い料理店」のほうが、むしろ自然に感じられるだろう。

「水仙月の四日」について

「水仙月の四日」では、登場する人（赤い毛布の子ども）が、「カリメラ」のことを楽しそうに思い浮かべながら、穏やかに（そりに乗せた）荷物（砂糖）を自宅に運んでいく途中で、環境が急変し、死にそうになるほどの吹雪に巻き込まれる。荷物を自宅まで届けるためには、この窮地を切り抜けなければならない。『注文の多い料理店』の他の物語では、こうした環境の変化は、人が、人以外の意志や感情をもった存在と出会う契機となる。しかし、この物語の場合は、この環境の変化の以前から、そもそも物語の最

図4. 「注文の多い料理店」



初から、吹雪そのものである雪婆んごの描写から始まる。物語のはじめから順番にエピソードを並べると次のようになる。

- ・「雪婆んごは、遠くへ出かけて居りました。」
- ・赤い毛布の子が、カリメラのことを考えながら家に帰る。
- ・（まだその場に到着していない雪婆んごの下僕である）雪童子と雪狼が戯れる。
- ・雪童子がふざけてなげたやどりぎの枝が、子どもの前に落ちて、それを子どもが拾う。
- ・美しい景色の描写から、徐々に雲行きが怪しくなる。
- ・やがて雪婆んごが登場し、集まってきた雪童子等に吹雪を起こすよう激しく執拗に命令をする。

ここから、場面は、雪婆んごによる強烈な破壊衝動に突き動かされる世界となる。物語展開上、不確実性＝不安定性＝不安が頂点へと向かい、人が自身と環境への制御を失い死の危険にさらされるが、その元凶である雪婆んごの破壊への意志に、人（赤い毛布の子）は、気づけない。雪婆んごも雪童子も雪狼も、赤い毛布の子には、見えないし、知りえない。「どんぐりと山猫」では、一郎は、山猫等と

会話をしていた。「注文の多い料理店」でも、紳士たちには変質した世界のレストランもその注文も見えていた。「狼森と笹森、盗森」も、村人は狼や山男等と話している。しかし、「水仙月の四日」では、赤い毛布の子は、吹雪の中にあっても飽くまでも人の世界に留まっている。雪婆んご等の声を聴くこともないし、その姿を見ることもない。一方で、雪婆んご等は、強力な意志にそって活動し、互いに意志を交流させる世界が展開する。この人の世界と雪婆んご等の世界は、交差しないまま平行して存在している。二つの世界が同時に存在しながら物語が進行していくのが、「水仙月の四日」の特徴である。

物語全体として見た場合、語り手の視点は、雪婆んごより先に吹雪を起こす場所（赤い毛布の子が通過する場所）に到着している最初の雪童子に偏っていて、この雪童子が、いわゆる物語の主人公の位置に立っている。いわば人の力の及ばない圧倒的な力を發揮する自然現象が主体となっている物語で、彼らからすると、簡単に死に至らしめることのできる人の声など聞こえないようである。それは、（人が自然にまみれて生活していた文明的な段階をはるかに超えて）動植物を操作できる可能性を広げてしまった現在の人々、またもつと露骨に言えば動植物を支配していると思いがちな現在の情報産業段階にある私たちにとって、支配

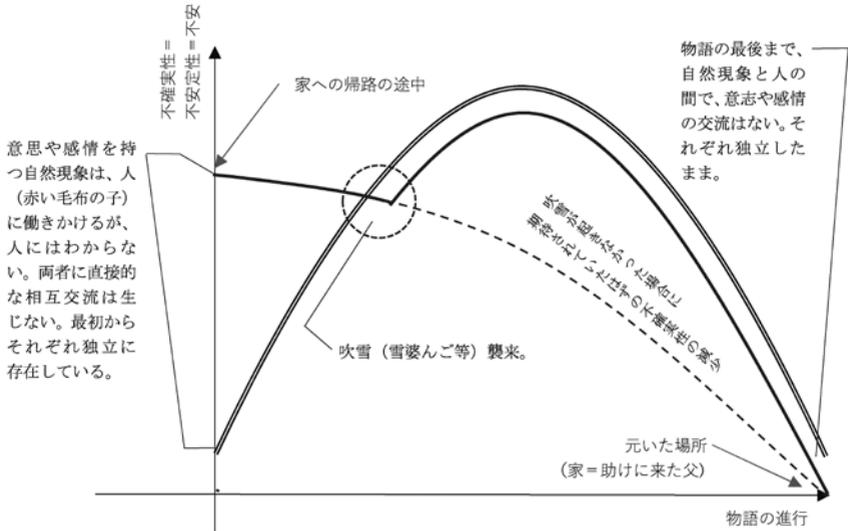
下にある動植物の声が聞こえないのと、同じようである。

ただ、子どもにやどりぎをなげた雪童子は、雪婆んごの下僕でありながらも、常に雪婆んごのような破壊衝動に象徴される猛烈な吹雪の状態にあるのではない。雪婆んごとともにいれば破壊的ともなり、そうでなければ、物語のはじめの場面で描かれる雪狼と戯れる場面や、雪婆んごが去った後で他の雪童子のメンパー等とおだやかに会話をする場面のように、ただしつとりと山や丘につもる雪、また雪だるまを作ったり雪をなげたりして遊ぶ時の雪（の象徴）でもあり、非常に人に近い位置で接する存在でもある。だから圧倒的な力を持つ雪婆んごには、人の声や意思は届かないが、雪童子には、人の気持ちを理解でき、やどりぎを投げて拾ったという間接的な交換によってさえ、ある種の交感が生じ、雪婆んごの目を盗んで子どもをこっそりと救げようとする気持ちが生起るのである。ただそれでも、赤い毛布の子には、雪童子の意志は、届くことなく、この物語では、彼らの世界と人の世界とは、どこまでも並行なままに描かれている。

「かしわばやし之夜」について

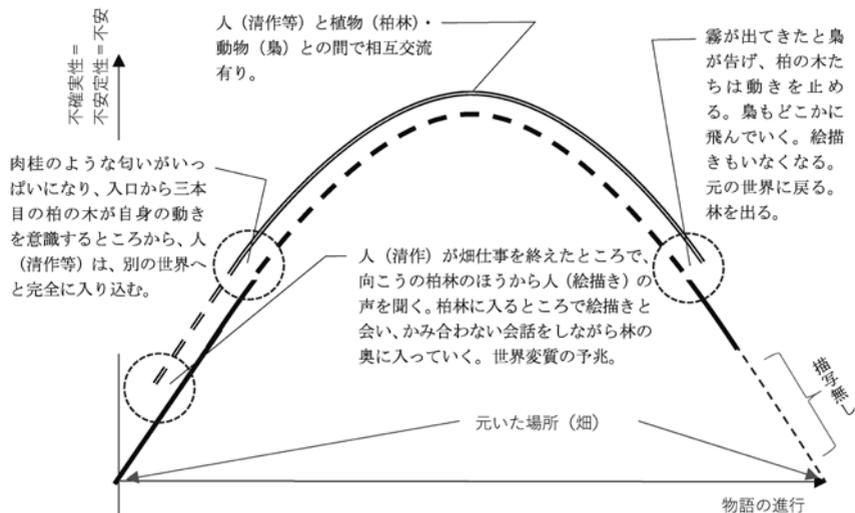
「かしわばやし之夜」において、はつきりと世界が変質していくのは、清作が自身の畑から、赤いトルコ帽を被っ

図5. 「水仙月の四日」



た絵描きと一緒に柏ばやしの中へと入り、肉桂のような匂いがいっぱいになるところからである。そこで、入口から三本目の柏の木が、清作等に気付き、彼らに対して自身の動きを意識する。この後に、清作は、柏の木に足を引っかけられそうになるところを、「よつとしよ。」とよけたり、柏の木らが、薄気味悪い声でおどそうとするのを、かえって清作がどなりつけておどしかえすなど、ある意味では、柏の木らが意志をもって語りかけたり、動いたりすることに、自然と応じている。そういう意味では、「狼森と笹森、盗森」の村人たちのように、植物が働きかけてくることに驚きがない。ただし、「狼森と笹森、盗森」の村人たちが、動物や自然物(森)に対してお願いをする立場であり、潜在的に従属的な立場から境界のないコミュニケーションが成り立っていたのに対し(従って図2では、人の世界の秩序を示す一重の線は、そのまま別世界の秩序を示す二重線に接続されている)、「かしわばやしの夜」の清作は、柏ばやしのルールの世界に入っても、完全に自分の世界のルールを消失させていない(図7のように変質した世界である二重線の下に一重の点線が平行している)。清作は、人の世界の売買のルール(酒を所有者に渡す)にそって手にいれた柏の林を切り倒すのは、正当なことであると、切られた仲間たちの恨みをぶつける柏の木たちに対して、まった

図7. 「かしわばやしの夜」



く譲らない。この対立の構図は、他の物語とは違う特異性をもっている。

この和解できない両者の間を取り持つのが、(おそらく)人でありながら社会的な立場の不明な赤いトルコ帽を被った絵描きである。そもそも絵描きが柏の林へと清作を誘いだむ時も、通常のロジックでは意味が成り立たない問いかけによって、さらに清作からも通常のロジックでは意味をなさない応答を引き出すことによって、その時の清作にとっては必要性も必然性もない林の中へと入っていく文脈を作り出す。また、清作と柏の木等との対立が生じたときも、必然性のない唐突な対象へと注意を転換させることによって、真偽や善悪が問われていた文脈を無効にしてしまう。芸術は、人の世界や社会が再生産的に継続されていくのに必要な物事や会話の生起する規則性やその蓋然性を変形させる。そのことによって新しい世界や社会の見え方や感じ方が生み出されるように、赤いトルコ帽の絵描きも、清作の利害と、柏の木たちの利害を、それぞれの「正しさ」を問うのとは違う文脈によって和解決せようとしているように見える(「おいおい、喧嘩はよせ。まん円い大将に笑われるぞ。」／「またはじまった。まあよくがいいようにするから歌をはじめよう。だんだん星も出てきた。いいか、よくがうたうよ。賞品のうただよ。」)

やがて柏林の歌合戦がはじまり、そのなかで清作は、か
らかわれたり、また反発もしたりするが、しかし決定的な
衝突は、柏の木たちの次々と歌い出す歌によって先延ばし
され、また回避される。

歌い踊る柏林が元の世界に戻る契機は、梟が「あつだめ
だ、霧が落ちてきた」と叫んだ時である。柏の木々は動き
と止め、梟も、そして画家もどこかに行ってしまう、清作
は、林を出る。その後、清作が自分の畑や家に戻るまでの
過程は、描かれていない（図7では、点線で示している）。
清作のなかで、柏の木々に対する認識が変わったり和解へ
と気持ち傾いたりしたのか、表現されていない。林の土
地の売買や絵描きの存在から暗示されるように、清作は、
「狼森と笹森、盗森」の村人のように素朴に自然に頼って
いくような産業段階や生活様式ではないし、柏の木に同情
して生活の糧を諦めることもできない。このリアリティー
を引き受けるように、物語内では、何かの解決にも到達点
にも至らないまま物語は終わっていく。そして、比較的わ
かりやすい利害関心を抱えた清作や柏の木々に対して、得
たいの知れないままの絵描きの声だけを最後の場面に残す
ことで（「赤いしゃっぱのカンカラカンのカン」と画か
きが力いっぱい叫んでいる声がかすかにきこえました。）、
文字通り社会現実的な対立や解決を超えたところにかすか

な希望を示しているようにも見える。

「月夜のでんしんばしら」について

「月夜のでんしんばしら」では、恭一のまえで電信柱が
動き出すところが、別の世界への転換となっている。物語
のはじまりにおいて、さほど移動もせずに、同じ風景が、
突如変貌する。

・ 恭一が、月明かりがぼんやりと照らす夜に、線路の
脇を歩いている。

・ 向こうの停車場を見ていると、「ぼつんとしたまっ
赤なあかりや、硫黄のほのおのようにぼうとした紫
いろのあかりやらで、眼をほそくしてみると、まる
で大きなお城があるように思われる」と感じた。

・ 右手のシグナルばしらの横木ががたんと動いた途
端、でんしんばしらの列が、歩きます。

そこに至るまでの恭一の目的や心理状態は、本文では説
明されていない。ただ、子どもが夜一人でいること、鉄道
線路の横を歩くことが罰金の対象になること、さらに「窓
から長い棒などが出ていたら、一ぺんになぐり殺され」る
ほど線路のすぐ脇を歩いていることが、書かれており、通

常とは違う状態にあることがわかる。また「すたすた」と歩いており、何かの目的や目標が示唆されている。さらに、月明かりから透けて映るうろこ雲、その隙間から見える星の描写も、恭一の心の状態を喻えているように読める。

とは言え、たとえば「どんぐりと山猫」や「注文の多い料理店」のように、はつきりとした異変が起きる場所までの移動が比較的長く細かく描写されている物語に比べると、「月夜のでんしんばしら」では、それがかなり省略されている（図8では、点線に示している）。そのような意味では、異変が起きる理由や別の世界が生じる理由に、たとえば移動による環境変化の描写によって必然性を持たせることより、列車や線路にそって並ぶ電信柱のような人工物からなる世界も、動植物や自然現象が意志や感情をもつて活動する世界のように変貌する可能性があることを描くことに物語の力点があるようである。

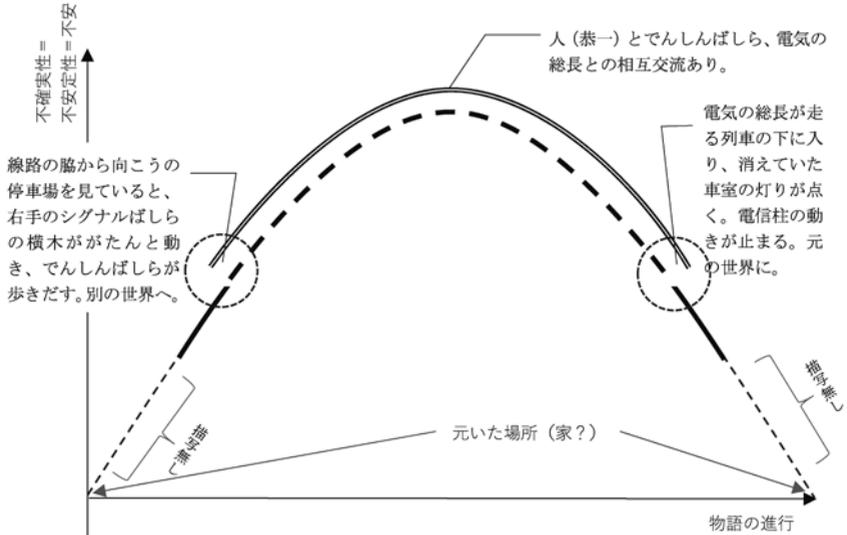
人類学的な調査は、狩猟採集社会におけるアニミズムが生活様式のなかに必然的に組み込まれていることを教えてくれる^v。動植物や自然物、自然現象が、人のように話しかけ、働きかけてくることは、現代を生きる私たちでも、直接体験としては知らなくても、文明史や産業の発達段階、そして子どもの認知発達の段階を想定すれば、想像的には得心できる。そして同じ人工物でも、いわゆる手作りのも

のであったり手工業的な人の身体の直接的な関与の痕跡を色濃く残していたりする人工物であるなら、たとえば付喪神のような存在への変化も想像できるだろう。しかし、月夜のでんしんばしら」で、意志や感情をもって活動するのは、直感的な印象としては、無機質で機能的な役割しかならない電信柱であり、目には見えないエネルギーとして流れる電気である。

もう一度、電信柱が歩き出す契機を見てみる。主人公の恭一が危険であることに気付けないほど注意力を失った状態で線路わきを早歩きしており、向こうの停車場の様子が大きな城のように見え、シグナル柱の横木が音を立てて動いたところで、電信柱が動き出す。比喩的な言い方をすれば、恭一のある種の催眠状態（への移行）が、電信柱に魂を吹き込んだようにも読み取れる。線路わきに規則性をもって並ぶ電信柱の連続性も、それを促しているかもしれない。しかしあらためて『注文の多い料理店』の序に書いてあることを「ほんたう」だとすれば、電信柱（や電気の総長）の振る舞いを恭一の心理状態によるいわば幻覚に還元してしまうのは、間違っている。むしろ電信柱の本来の姿を見るために、人が認識のモードを切り替える必要があることを描写していると理解したほうがよいのだろう。

そして電信柱と電気の総長たちが元の姿に戻るの（電

図8. 「月夜のでんしんばしら」



信柱が動かなくなり、電気の総長が姿を消すのは、列車の客室内の消えた灯りを正常に点灯させるために、電気の総長が列車の下に飛び込んだ直後である。電気の総長も、電信柱も、その機能が普段通り働いており、人が普段通りの距離感で接している時には、現に私たちが見るような姿をしているが、恭一がそうであったように、もっとそれらに（いわば命の危険を度外視して）近づき接するときに、その本当の姿を現すのだ、と作者の宮沢賢治は描いているように見える。また電気の総長が、人間がそう設計した普段通りの役割に戻ったときに（列車の灯りを点けたように）、やはり文字通り機能的な存在に、電気も電信柱も戻ってしまうようだ。

「月夜のでんしんばしら」について、作者には電信柱や電気エネルギーがそのように見えるということなのか、それ以上にある種の倫理観や思想が込められているのか、ここでは結論を出せないが、（動植物や自然現象との対比で）近代的な人工物にも心や魂を見出すことに、ナイーブなエコロジストではない宮沢賢治の姿勢を見ることができさる。

「鹿踊りのはじまり」について

「鹿踊りのはじまり」では、すでに目の前で動き回って

いる鹿を夢中になって見入っている嘉十に、その鹿たちの声が聞こえるようになる。ここで嘉十は、別の世界に移っている。「水仙月の四日」は、赤い毛布の子が別の世界に入っていくというよりも、雪婆んごが、別の世界をその子のもへと運んでくるといった展開である。それ以外の「どんぐりと山猫」「狼森と笹森、盗森」「注文の多い料理店」「かしはばやし」の夜は、文字通り移動によって別の世界に入っていく。「鹿踊りのはじまり」は少し違っている。住み慣れた家から離れた山奥へ移動はしているが、移動した先の、いわば同じ物理的な環境が、嘉十の普段の認識のモードから、鹿たちの認識モードへと切り替わることで、別の世界へと転じている。

- ・ 嘉十は、栗の木から落ちて左膝を悪くしていた。泊りがけの湯治のために、「糧と味噌と鍋とをしょって」びっこをひきながら、西の山の中に。
- ・ かなり歩き「太陽がもうよほど西に外れて」くる頃は、はんのきの木立が見えるところで、休みながら栃と栗とのだんごを食べる。
- ・ また荷物をしょって歩き出し、少し行ったところで、手ぬぐいを忘れたことに気付き、戻ってみると、鹿たちが、手ぬぐいの周りを回っていた。

- ・ 息を殺して、鹿たちの様子を覗く。はんのきが青い生き物のように見えたり、すすきの穂の一本ずつ銀色にかがやき、鹿の毛並みがりっぱに見える。
- ・ 鹿たちは、手ぬぐいの周りをくるくる回る。
- ・ 鹿たちは「まわるのをやめてみんな手拭のこちらの方に来て立」ち、嘉十の「耳がきいと鳴」る。
- ・ 鹿たちの話し声が嘉十に聞こえる。

嘉十が、鹿たちの様子に魅了され意識を集中させて見入っているうちに、鹿たちの行動の意味や意図が正確に精緻に予測できるほどの同調性が嘉十のなかで高まって（鹿たちの行動がモデル化できて）、ある種のフロー状態に入ったことを「耳がきいと鳴」というふうに表示しているように読める。そこからは、鹿たちの意志が手に取るようにわかるようになり、文字通り鹿たちの話す声として認識されているようである。

その後、鹿たちの振る舞いに対して嘉十の心に強力な同期が生じているが、直接的な相互交流は生じない。鹿たちは、嘉十の存在に気づいておらず、一方、嘉十は、鹿の振る舞いが心的に模倣されていて、自身が鹿になっていく。鹿たちの手ぬぐいに対する興味や恐れ、その恐れをからかったり楽しんだりする感情、また手ぬぐいへの心配が解

けた後も柝の実団子を食べることのできた高揚感や神秘的な榛の木の美しさに心奪われる状態も、嘉十にトレースされる。そして、すっかり嘉十が鹿と自他の区別がつかなくなり、鹿たちのまえに飛び出してしまったところで、鹿たちは逃げていき、嘉十の心のなかで生じていた鹿とのシンクロは解けてしまう。

この間、嘉十と鹿たちの間には、「どんぐりと山猫」等のような人と人以外の存在との心的な相互交流は生じていない。「注文の多い料理店」や「水仙月の四日」がそうであるように感情的な交流が生じたりしない物語である。

「注文の多い料理店」や「水仙月の四日」では、人が死に追い込まれていく過程がある。ここは、『注文の多い料理店』の作品のなかでも、この二つの物語の特徴で、自然が、その気になれば人の死を左右できる圧倒的な存在であることが表現されているように読める。そして「鹿踊りのはじまり」において、鹿たちのふるまいも細やかで愛嬌もあり美しいが、榛の木とともにあるときのある種の神秘的な崇高さは、人の世界を超えた圧倒的な存在感として描かれている。つまり「注文の多い料理店」「水仙月の四日」「鹿踊りのはじまり」の三つには、人と人以外の存在との間に心的な相互交流は起きないが、それは両者のあいだの圧倒的な力の不均衡やその距離感に基づいており、それ自体の

表現となっている。

ただし、「水仙月の四日」と「鹿踊りのはじまり」の二つに絞ってもう少し丁寧に見てみると、「水仙月の四日」で、(雪婆んごはさっぱり人(赤い毛布の子)と意思を交わす気などなく、容赦なく殺す気しているにしても)、雪童子のほうは、赤い毛布の子のまえにやどりぎの枝を意図的に投げたように(読みとることができ)、嘉十も柝の実の団子を意図的に置いていった。雪童子と嘉十の存在やその意図は、赤い毛布の子と鹿に伝わらないが、それらが知られないまま、毛布の子はやどりぎの枝を手にし、鹿は柝の実を口にする。それだけでなく、雪童子が、雪に埋もれた毛布の子に「お父さんが来たよ。もう眼をおさまし」と語りかけたのに応答するように、「子どもはちらつとうごいたようでした」とあり、鹿たちは、嘉十がただ忘れていた手ぬぐいに特別な関心を示す。意図が共有されていないにも関わらず、間接的にあげたものが受けとられていたり、関心を示す様子をみたりして、雪童子も嘉十も、やはり間接的に受容され承認されている。死をもたらず力であったり、神秘的な崇高さであったりと人の存在に対して決定的な距離を設定しながら、にもかかわらず、間接的な、または食い違いながらもかすめるような交感が生じているところだが、これらの作品の特徴である。それは、比較的スムー

ズに、そしてある程度対等に意思疎通を取る「どんぐりと山猫」「狼森と笹森、盗森」等と対照的に、人が、動植物・自然等の世界に対して、干渉できない領域があることを想定しているようである。

「またやはり心的な交流が生じない」「注文の多い料理店」と「鹿踊りのはじまり」の二つについて対比してみると、「鹿踊りのはじまり」に見られるような鹿とそれを取り巻く自然の圧倒的な存在感に対する感受性を失った近代人たちに對して、まさに近代人の生活様式を逆手にとったようなトランプを「注文の多い料理店」の山猫たちは仕掛けている。二人の紳士は嘉十のような好奇心と集中力をもって息を殺して鹿たちを覗き見したりしない。そうした二人は、榛の木が神々しく光る美しさに飲み込まれてしまうような神聖な体験をすることもない。彼らにとつて狩猟は遊戯の延長にあつて鹿の横つ腹を撃ち抜くことに罪責感もためらいもない。そうした人たちに、山猫たちは、もちろん同情はせず、彼らの意思や気持ちを聞くまでもなく、おいしく食べる準備をひとつひとつ重ねていくのである。「水仙月の四日」や「鹿踊りのはじまり」のようないわば生身の人に自ずと生じる危険性や畏敬の念に根柢をもつ距離やコミュニケーションの行き違いに対して、「注文の多い料理店」における距離や意思疎通の断絶は、人間による近代的な進歩

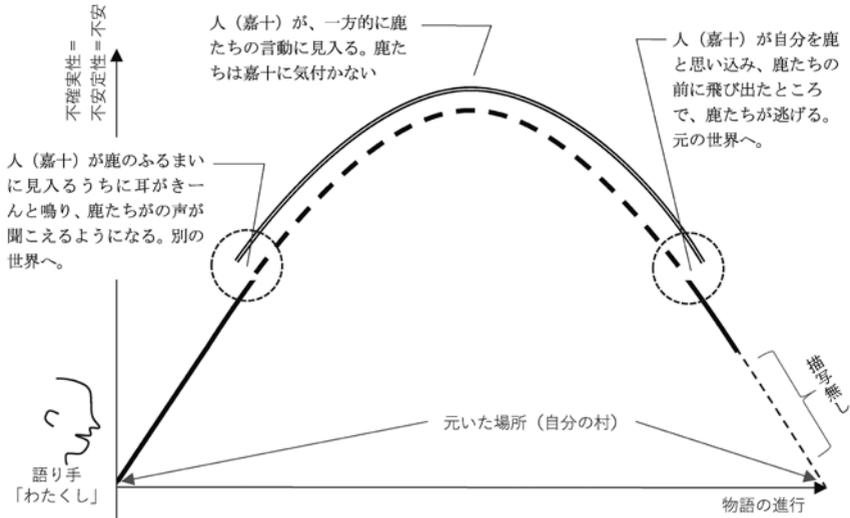
が招いたものである。

「鹿踊りのはじまり」の特徴についてもう一点追加しておく、それは、「狼森と笹森、盗森」のように、語り手が、物語の前後に積極的に登場していることである。厳密な一貫性をもって説明することはできないが、この語り手は、自然のなかの生活から大きく乖離した人工的な環境で生活を送る私たちが、とてもこれらの物語を真に受けることが無いことを承知しているからこそ、用意されているだけでなく（それだけであれば、『注文の多い料理店』に収められている他の物語も同様であるが）、にもかかわらず、こうした物語が「ほんとう」のことであることへの信念を、ぜひとも刻んでおかななくてはならないと宣言しているようである。この語り手の言葉は、そのまま『注文の多い料理店』の序の内容の具体的なケースとなっている。

まとめ

以上、『注文の多い料理店』のなかで、人が、人以外の存在が意思や感情をもって行動する世界に入っていく物語をとりあげ、そうした世界に登場人物がどのように入っていく、どのように接し、またどのように元の世界に戻ってくるのか、検証してきた。

図9. 「鹿踊りのはじまり」



具体的には、入る過程、接し方、戻る過程の三つの側面に注目し、かつそれらを一連の流れとしてグラフ化することで、『注文の多い料理店』の九つの物語のうち、人が登場する七つの物語に関しては、共通の観点から、比較検討し、それぞれの物語の違いや共通性を特徴付けることができた。

宮沢賢治が、『注文の多い料理店』に収める物語を選択するにあたっては、作者宮沢賢治にとって意識的にも無意識的にも、ある種の必要性や必然性があったと想定できる。本来は、『注文の多い料理店』に続いてさらに童話集を刊行する予定であったとしても、『注文の多い料理店』はそれ自体で相対的に独立した童話集であり、そこに収められた物語を一つの全体的な物語として理解できるような、または広い意味で統一的思想の表現として扱うことができるような視点も、仮説的には設定できるように思える。本論では、人と人以外の存在との接触という観点から、七つの物語を共通の基準にそって配置することができた。それをさらに残りの二つも取り込み、九つすべてを比較できるような視点を設定することが次の課題である。

ⁱ 本論で取り上げる宮沢賢治の『注文の多い料理店』のなかの物語は、すべて青空文庫にあるものを資料として使用している。青空文庫内の図書カード番号:No.43754「注文の多い料理店」に童話集『注文の多い料理店』の作品リストとリンクが載っている。URLは次。

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000081/card43754.html>

これに基づき各作品の青空文庫の図書カード番号、作品名を記す。それぞれの作品は、「新字新仮名」版と「新字旧仮名」版があり、本論では、基本的に「新字新仮名」を使用した。

- No.43736 『注文の多い料理店』序
- No.43752 ごんぐりと山猫
- No.43753 狼森と筑森、盗森
- No.43754 注文の多い料理店
- No.43755 鳥の北斗七星
- No.43757 水仙月の四日
- No.43758 山男の四月
- No.43759 かしわばやししの夜
- No.43756 月夜のでんしんばしら
- No.43760 鹿踊りのはじまり

ⁱⁱ 『注文の多い料理店』には、表1にあるような順番で作品が並んでおり、その作品名の前に振った番号に応じて、グラフにも図1～9まで降っている。したがって、本論では取り上げない「3. 鳥の北斗七星」に対応する図3と、「6. 山男の四月」に対応する図6は、作成しておらず載せていない。

ⁱⁱⁱ このグラフ化の基本的なアイデアは、K.フリリストンの自由エネルギー原理を使って感情の性質の解析を試みたM.Joffily等の次の論文に負っており、特に論文内のFigure 1. Basic forms of emotion and the dynamics of free-energy から大きな示唆を得ている。ただし、本論では、M.Joffily等の論文にあるような数理的な理解にそって厳密に自由エネルギー原理を反映できていないため、概念的な応用に留まっている。

Joffily, M., Coricelli, G. (2013) Emotional Valence and the Free-Energy Principle. *PLoS Computational Biology*. 9:e1003094.

また、グラフ化のアイデアには、大塚英志(2014)「キャラクターメーカー 6つの理論とワークショップで学ぶ「つくり方」」星海社の巻末付録の28のグラフからも大きな示唆を得ている。大塚のこのグラフは、実践的に物語を

作るために使用されるものであるが、「行く―帰る」「欠如―充足」等の物語の基本構造となる要素を体系的に表示できるものとなっており、物語分析への応用性が高い。ただし、本論のグラフ作成にあたっては、先の MJOHELY 等のグラフのメリットを活かすために、大塚のグラフの縦軸と横軸の基本的な概念を入れ替え、物語を構成する個々のエピソードは省いてある。

iv アニミズムのな認識様式自体が未発達であると言いたいのではない。高度に産業化された生活をしている現在の私たちの常識的な理解として、子どもの発達段階の初期にアニミズムのな認識様式があり、それが、たとえば「花が笑っている／車が怒っている」等の実際の言語表現としても語られ、やがてそうした認識様式を脱しながら、今述べたような言い方もしなくなっていく。一方で、現在を生きる私たちに於いても、より積極的な意味で、アニミズムのな認識様式を持ちうる可能性を示唆する事例としては、綾屋紗月、熊谷晋一郎(2008)「発達障害当事者研究―ゆっくりといねいにつなりたい」医学書院 P178-187 の記述があり、その中の特に植物とのコミュニケーションに関する節「5. 草木の声」は、重要である。

v たとえば、「鹿踊りのはじまり」における嘉十の鹿に対する一体化の状態も含めて、アニミズムの生活様式と認識様式については、次を参考にした。

R ウィラースレフ(著)、奥野他(翻訳)(2028)「ソウル・ハンターズ―シベリア・ユカギールのアニミズムの人類学」亜紀書房

特に、同書 P11-12 及び P211-212。

参考文献

- 「綾屋紗月、熊谷晋一郎(2008)発達障害当事者研究―ゆっくりといねいにつなりたい」, 医学書院.
- ① 乾敏郎, 阪口豊(2020)脳の大統一理論:自由エネルギー原理とはなにか, 岩波書店.
- ② 乾敏郎, 阪口豊(2021)自由エネルギー原理入門:知覚・行動・コミュニケーションの計算理論, 岩波書店.
- ③ 大塚英志(2014)キャラクターメーカー 6つの理論とワークショップで学ぶ「つくり方」, 星海社.
- ④ 小野田貴夫(2014)『注文の多い料理店』の幻想に入らための過程, 常葉国文・常葉大学短期大学部日本語日本文学会 編 (31)
- ⑤ R. ウィラースレフ(著), 奥野他(翻訳)(2018)「ソウル・ハンターズ―シベリア・ユカギールのアニミズムの人

類学」亜紀書房.

7. Joffily, M., Coricelli, G. (2013) *Emotional Valence and the Free-Energy Principle*, PLOS Computational Biology. 9:e1003094.014

(おのだ・たかお 本学教員)

近代沖縄における字書利用の一例

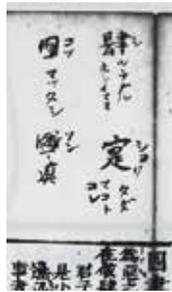
— 北谷町教育委員会文化課蔵『四書體註』による —

中野直樹

【図1】 北谷町教育委員会文化課蔵『四書體註』（中庸）



【図2】 欄外に見える字書の引用例



1、はじめに

近年、琉球における漢文訓読の実態が少しずつ明らかになりつつある¹。漢文訓読の場において、日本では古くから字書を本文の字義の解釈のため利用することがあったが、琉球でも漢文訓読が行われていたのであれば、これと同様の事象（漢文訓読に付随する形での字書利用）があったことが考えられる。実際、琉球の士人による字書利用の実態が先行研究においてすでに指摘されている。琉球だけ

でなくその後の近代沖縄において、漢文訓読の際にどういった字書がどのように利用されていたのかという点は、当地の漢文訓読事情に関連して興味深い問題である。今回取り上げる北谷町教育委員会文化課に保存されている『四書體註』（以下、「体注」）は沖縄県北谷町で易者をしていた金良宗邦氏の旧蔵である²。本書の本文欄外には、金良氏のものと思われる書入れが散見される。この書入れのうち字書の引用文については、近世琉球以来近代沖縄でどのような字書が流通していたのか、またどのように字書が利用されていたのかを伺うことができる点で国語学的に注目される。本稿は、近代沖縄の字書利用の実態について金良宗邦氏旧蔵の「体注」を用いて若干の考察を行ったものである。

2、字書の引用文の検討

「体注」の本文上・下欄外には、合計238箇所³に字書の引用がある。（引用文例は【図2】。全例は稿末表参照）。この引用文には朱墨の二種がある（朱墨の意味は未勘）。三浦（1993）は、欄外の書入れ（字書引用文・メモ）は元所蔵者の金良宗邦氏によるものとする。書入れのうち、メモの中には、「哲学」など近代以降に訳語として作られた語彙が使われており（【図3】）、確かに金良氏か金良氏と同

時代人のものと思われる。

【図3】 金良宗邦氏によるものと思われる書入れのうちメモ



筆者が原本を確認したところ、欄外の字書の引用文とメモとは筆勢から同筆と思われる、ともに金良宗邦氏によるものと一応判断する³。今回本書に見られる字書の引用文と『増続大広益会玉篇大全』（以下、「玉篇大全」）を比較してみると、238個中194個が一致した（約82%）⁴。したがって、「体注」の字書引用文の典拠は、「玉篇大全」そのものではなく「玉篇大全」を基礎とした改編本であったと考えられる⁵。一方で、「玉篇大全」およびその改編本（今回は「新増字林玉篇大全」）を用いた。以下、「字林」に注文が有るにも関わらず、「体注」に無い注文や（【図4】）、逆に「体注」に有って「玉篇大全」およびその改編本に無い注文も

ある〔図5〕。

【図4】

「玉篇大全」・「字林」のイキドヲ(ホ)ル訓・フツクム訓が「体注」(論語1ウ)に無い例



* 図版は上から、「体注」、「玉篇大全」、「字林」の順。以下同じ。

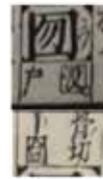
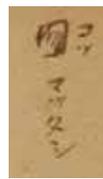
【図5】「体注」(大学9ウ)のムラガル訓が「玉篇大全」・「字林」に無い例



他に、「玉篇大全」に合わず、改編本の注文と「体注」の字書引用文とが一致する注文もある〔図6〕。この注文は、「玉篇大全」ではなく、「玉篇大全」の改編本を利用した可能性を高める例である。また、同じ漢字が繰り返し引用されることもあるが、注文が異なることがあることか

ら、複数の別の字書を用いた可能性もある⁶。

【図6】「体注」(中庸3ウ)のマツタシ訓が「玉篇大全」に無く、「字林」に有る例



元禄五年に出版された「玉篇大全」は、明治期に至るまで刊行されるが、その間に幾多もの類似した改編本が刊行された⁷。「玉篇大全」はその版種の多さから、近世期・明治期にかけて相当流通したものと思われるが、この字書が近世琉球でも用いられていたことが指摘されている(武藤(1917)・東恩納(1972)・水上(2013・2014・2015)・真栄平(2016))。これまで、琉球において「玉篇大全」が利用されていたことは上記研究で指摘されていた。今回「玉篇大全」の改編本が少なくとも明治期の段階で沖縄に到達していたことが本書の引用文から明らかとなった。「玉篇大全」の改編本は、沖縄県教育庁文化課編(1981)や高津・築野川(2005)の目録には上がっていないが、琉球・沖縄には多様な字書の流通があったことが想像される⁸。

次に、本書の引用文はいつ頃誰が書き入れたものかとい

う点については、本書に奥書等がないため、明確には分からない。先述の通り、三浦(1993)は、欄外の書入れ(字書引用文・メモ)は元所蔵者の金良宗邦氏によるものとしている。これによれば、金良氏の生没年から、これら書込みは20世紀中期頃に書き込まれたものと考えられる。

3、字書の引用箇所について

「体注」の欄外に字書が引用された箇所には何らかの基準があるものと思われる。字書で音訓の注釈を加えられた漢字は、下欄の経文・割注、上欄の注解いずれの箇所にも見られる¹⁰。字書を引き、注文を書入れておいたからにはその箇所が特に難解であるか、書入れ者にとって重要な箇所であることを示していると考えられる。そこでどの漢字に対して字書が引かれているのかを見てみると、確かに(現代の目から見て)見慣れない字が含まれているものの(例えば「謫」・「罔」など)、難解とも思われぬ字も見られる(例えば「故」・「箸」など)。これは、普通には浮かびにくい訓で当該箇所を読む必要があった可能性がある(例えば「逆」ムカヘル、「洪」オホヒナリなど)。いずれにせよ書込み者にとって何らかの必要性があったものと考えられる。「四書體註」は先行研究で言われているように、国

学の試験問題用資料として、また科試(琉球の科挙)の対策用参考書として使用された。国学の試験問題における「体注」の出題範囲は全て明らかでないわけではないので、さらに検討を重ねたうえで、念のため今回調査した字書引用箇所との比較を今後行いたい¹¹。

本書の書入れがすべて金良氏によるものとするれば、本書と国学の試験や科試とは直接関わらないことになるが、金良氏が士族階級にいた人物から漢学の手ほどきを受けていた可能性がある以上は、右の作業をしておくことは無駄ではないと考える。科試自体は光緒二年(1876)頃終了している(水上(2014)参照)、金良氏が受験した可能性は無い。

4、本文の訓点と字書の関係

ここでは、「体注」の上下欄外に引用された字書の注文とその対応箇所の訓点との関係について考察したい¹²。まず、両者の関係性を数量的に見ておく。

「体注」本文に訓点が無く、字書引用文と比較できない例	219
「体注」欄外の字書引用文と本文の訓点が一致する例	5
「体注」欄外の字書引用文と本文の訓点が一致しない例	9

「体注」欄外の字書引用文に注文が無く比較できない例
 「体注」の字書引用文全例 238 5

このように、字書引用部分に対応する本文の大部分にそもそも調点が付されていない(219箇所)。全体的に句読点・傍線・圏点は最後まで付されているので、加点著が「体注」本文を丁寧に見ていることは確かである。ただし、字書の注文を欄外に引用して、さらに本文に調点として書き込むことは殆どしなかったようである(5箇所)。右の結果で注目されるのは、字書の引用文と本文の調点が一致しない箇所である(9箇所)。この9箇所に対応する調点を「玉篇大全」で引いてみると、9例中5例「玉篇大全」に存在した。この場合は、欄外への引用文形式ではなく、字書を引いて本文に直接書き込んだ例と考えられる。右から、「体注」の調点にあつて「玉篇大全」に全く確認できない調点は4例ということになる。

以上より、本文の調点と字書とに数量的には密接な関係は見出しがたいが、両者が無関係というわけでもないことが分かった。また、字書の引用に際して字書の名称等は全く示されていないので、字書を訓読に際しての正当な典拠として利用したというよりは、あくまでツールとして利用したものと考えられる。

5、まとめ

本稿で指摘したことは以下の通り。

- ① 近代沖繩には「玉篇大全」以外にその改編本も流通していたと考えられるが、現物は確認されていない。おそらく、当時琉球・沖繩で流通していた字書類の多くはすでに失われたと考えられる。
- ② 「体注」の字書引用文は「玉篇大全」の改編本である可能性が高い。また、複数字書が典拠となっている可能性もある。
- ③ 字書と「体注」の調点には一定の関係がある。ただし、字書名を明示していないので、字書を権威的には利用していない。

【参考文献】

- 浅野誠(1991)『沖繩県の教育史』思文閣出版
 沖縄県教育庁文化課編(1981)『八重山諸島を中心とした古文書調査報告書』(沖縄県文化財調査報告書(35)) 沖縄県教育委員会
 関場武(2007)「毛利貞斎編『増續大廣益會玉篇大全』」『古

文書の世界』慶應義塾大学文学部

高津孝・榮野川敦 (2005) 『増補琉球関係漢籍目録』(近世琉球における漢籍の収集・流通・出版についての総合的研究 研究成果報告書別冊) 斯文堂

北谷町教育委員会編 (1993) 『金良宗邦文書―易・擇日・風水―』(北谷町中間報告書) 北谷町教育委員会

北谷町史編集委員会編 (1992) 『北谷町史』(3 資料編2 民族 上) 北谷町役場

中野直樹 (2022a) 「琉球における漢文訓読の実態―琉球版『論語集注』による―」『訓点語と訓点資料』(149) 訓点語学会

語学会

—— (2022b) 「琉球の科試関連資料―東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ―」『汲古』(82) 汲古書院

林義雄 (1989) 「日本の字典 その3」『漢字研究の歩み』(漢字講座2) 明治書院

東恩納寛惇 (1972: 重版) 「琉球の学問と四書偲言鈔」『琉球の歴史』(日本歴史新書・増補版) 至文堂

真栄平房昭 (2016) 「和漢の境界を越えて―琉球における書物文化の受容―」沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『第十一回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集 沖縄県教育委員会』(真栄平房昭 (2020) 『琉球海域史論』

—— (2022b) 「琉球の科試関連資料―東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ―」『汲古』(82) 汲古書院

(下) 榕樹書林 による)

眞境名安興 (1916) 「教育界の偉人程順則」『沖繩之五偉人』小沢書店 (『眞境名安興全集』(4) 琉球新報社 (1993) による)

—— (1917a) 「沖繩に於ける孔子教の沿革」『琉球新報』(6/12-21) 琉球新報社 (『眞境名安興全集』(3) 琉球新報社 (1993) による)

—— (1917b) 「佐藤一斎と鄭元偉 (久米の湖城)」眞境名安興か (1917b) 『酒前茶後』「沖繩毎日新報」沖繩毎日新聞社 (『眞境名安興全集』(3) 琉球新報社 (1993) による)

—— (1923) 『沖繩一千年史』日本大学 (『眞境名安興全集』(1) 琉球新報社 (1993) による)

—— (1926) 「沖繩郷学の発祥について」『沖繩教育』(151) 沖縄県教育会事務所 (『眞境名安興全集』(3) 琉球新報社 (1993) による)

—— (1931) 「沖繩教育史要」『沖繩県師範学校創立五十周年記念誌』沖縄県師範学校校友会 (『眞境名安興全集』(2) 琉球新報社 (1993) による)

—— (1993) 「漱芳軒合纂四書體註(解題)」『金良宗邦文書―易・擇日・風水―』(北谷町中間報告) 北谷町教育委員会

—— (2013) 「琉球士人漢籍学習拳隅―以漢籍中写入水上雅晴」(2013) 「琉球士人漢籍学習拳隅―以漢籍中写入

—— (2022b) 「琉球の科試関連資料―東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ―」『汲古』(82) 汲古書院

—— (2022c) 「琉球の科試関連資料―東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ―」『汲古』(82) 汲古書院

—— (2022d) 「琉球の科試関連資料―東京大学附属図書館南葵文庫蔵『四書體註』の書入れ―」『汲古』(82) 汲古書院

的訓点和注記為考察中心―』『復旦学報』(6) 復旦学報編輯部

――(2014)「琉球地方士人漢籍学習の実態・書き入りに着目した考察」『琉球大学教育学部研究紀要』(84) 琉球大学教育学部

――(2015)「琉球中央士族の漢籍学習について：楚南家本を中心とする初歩的考察」『沖縄文化研究』(41) 法政大学沖縄文化研究所

――(2017)「琉球「科試」の実施状況について」『沖縄文化研究』(44) 法政大学沖縄文化研究所

武藤長平(1917)「琉球訪書志」『歴史地理』(29)・1・2・3) 日本歴史地理学会(武藤長平(1986)『西南文運史』岡書院による)

山田忠雄(1959)「漢和辞典の成立」附録本邦辞書史概説附表―会玉篇から漢和辞典へ―』『国語学』(39) 国語学会

【使用文献】

北谷町教育委員会文化課蔵『漱芳軒合纂四書體註』道光十一年刊(1831)

架蔵『増統大広益会玉篇大全』明治三十八年九版(1780) 郁文舎・松村文海堂発行

架蔵『新刻訂正新增字林玉篇大全』寛政九年序(1797) 無

刊記

架蔵『新刻訂正新增字林玉篇大全』文政十三年六刻(1820) 前川六左衛門・須原屋茂兵衛・秋田屋太右衛門・秋田屋市五郎・檜皮屋友七郎・鹽屋佐吉・河内屋喜兵衛・敦賀屋清助・敦賀屋九兵衛

【書誌事項】

写刊 刊本

数量 六冊

外題 四書體註

内題 漱芳軒合纂四書體註

柱題 四書體註

刊年 道光十一年(見返しによる)

残存 全存

蔵書印 燮鼎

序跋 范翔序

装訂 袋綴じ

寸法 縦33.334 糎・横19.3 糎

丁数 一冊目、五十九丁 二冊目、八十八丁 三冊目、

八十丁四冊目、一〇一丁 五冊目、六十三丁 六冊目、六十六丁 (いずれも遊紙除く)

書人 墨筆に二筆か(金良氏+某氏)、朱筆に一筆(金

良氏)、臘脂筆に一筆か(某氏)、赤ペンに一筆(金良氏)がある。

その他

『金良宗邦文書』(北谷町中間報告書)に掲載された表紙写真と現物とが合わない。『金良宗邦文書』は平成五年に刊行されたが、平成六年の補修・修復の際に表紙が破棄された可能性がある。

〔付記〕

北谷町教育委員会文化課又吉様はじめ課員の皆様より資料閲覧・利用に際して御厚誼を賜りました。記して感謝申し上げます。本稿は、JSPS 科研費「琉球における漢文訓読に関する研究」(課題番号:20K13058)による助成を受けています。

注

1 琉球における漢文訓読に関する研究史は中野(2022a)を参照。

2 金良宗邦氏は明治31年(1898)生、昭和62年(1987)歿。琉球処分は明治4年(1871)なので、氏は琉球時代の人物ではない。但し、氏の母方の祖父は首里士族で

あったことから、旧士族相当の教養を授けられたものと考えられる(金良氏の来歴については、『金良宗邦文書―易・擇日・風水―』6頁参照)。琉球処分後、明治期の沖縄県では、学校教育制度も明治政府の統治下に置かれるようになり、当初旧慣習温存策などにより制度上混乱がありながらも徐々に統一されていき、沖縄県に師範学校以下各種学校が整備されていった。時期・出身地・居住地地域により就学率・出席率はまちまちであったようだが、金良氏が就学したのは明治30年代後半から40年代であるから、おそらく小学校までは進学したものと思われる。浅野(1991:200)によれば、全県的に明治44年の段階で、65%が小学校に就学している。当時の小・中学校でもさすがに、「体注」のような高度なものまで学習範囲には入っていなかったであろうから、学校以外の場で漢文読解の訓練を受けたものと考えられる。眞境名(1931:424)・浅野(1991:162)では、小学校に入学しても漢学の指導を学校外で父兄等から受けるケースが指摘されているので、金良氏も同様の指導を受けていた可能性がある(但し、眞境名氏・浅野氏が挙げたケースは首里・那覇士族層の子弟の話であり、しかもいつまで続いていた慣習であるかもよくわからないので、明治31年生まれの金良氏に当てはまるのかや不安ではある)。

金良氏は、十四歳頃から八年間ほど母方の祖父より易に
関する手ほどきを受けたと証言している（『北谷町史』
（3）・506）。当然、この際には漢籍の手ほどきを受け
たと考えるのが自然である。

3 この書入れは、金良氏旧蔵書のうち『周會魁校正易經
大全』（向国瑞氏等旧蔵）・『御纂周易折中』（和字慶氏旧
蔵）・『玉匣記通書廣集』（金良氏手写本）にも見られる。

4 仮名遣いの差（アラワス・アラハスなど）や濁点の有
無（イサキヨシ・イサギヨシなど）があってもこれは不
一致例として計算しなかった。

5 試みに、「玉篇大全」の改編本の『新增字林玉篇大全』
と比較すると、238個中191個が一致し（約80%）、一致率
としては「玉篇大全」とほぼ変わらなかった。他の改編
本もいくつか見たが、今回の調査ではどの改編本が使わ
れたのか、明確な一本を指摘することはできなかった。

6 書入れには朱墨の別があるが、音注のみ朱筆や音注のみ
墨筆の例があり、朱墨で書入れ時期が違っているかもしれ
ない。書き入れ時期によって使用した字書が異なっている
可能性もある。朱筆箇所は200、墨筆箇所は38、合計238と
なっており、朱筆の方が圧倒的に多い（稿末表参照）。

7 どのようなものが「玉篇大全」の改編本として刊行さ
れたのかは山田（1959）を参照。「玉篇大全」の版種に

ついでには林（1989）・関場（2007）を参照。

8 「玉篇大全」は目録に上がっている。また、金良宗邦
文書には辞書・字書類は含まれていないので、残念なが
ら金良氏が使用した字書は失われたようである。『北谷
町史』（3）510頁に、蔵書の半数は戦災で焼失したとある。

9 金良氏のいつごろの書き込みか明確にできないのは残
念であるが、三浦（1993）によれば孟子第三冊表紙裏に
「昭和九年甲戌九月求 宗邦」とあるとのことであるの
で、これ以降の書き込みと見てよいであろう。昭
和九年は1934年で、金良氏36歳である。但し、この記
述は私には発見できなかった。そもそも、孟子第三冊の
表紙見返しが改装されてしまっている。この際に右の記
述の部分が破棄された可能性がある。今は三浦氏の記述
に従いたい。

10 このことから、字書の書入れ者は上下欄共に読んで
たことが分かる。

11 琉球王国の学校制度・科試については、眞境名（1916・
1917a,b・1923・1926・1931）・水上（2013・2014・2015・
2017）・中野（2022b）等を参照されたい。

12 本稿では、書誌学で送り仮名と言われるものを国語学
の用法に従い訓点という。

（なかの・なおき 本学教員）

【参考図版】

架蔵『増統大広益会玉篇大全』明治三十八年九版(1780)
 郁文舎・松村文海堂発行



架蔵『新刻訂正新增字林玉篇大全』寛政九年序(1797) 無
 刊記



【稿末表】

【凡例】

- ・一段目に通し番号、二段目に四書の掲載書名を示す。
- ・三、四段目に用例所在の巻丁数を示す。
- ・五段目に「体注」欄外の書入れ(字書引用文)を示す。
- ・六段目に「体注」欄外の書入れと「体注」本文の訓点が一
 致するか否かを示す。一とあるのは、訓点がなく比較
 できないことを示す。
- ・七段目に「体注」欄外の書入れが朱墨いずれであるかを
 示す。
- ・八、九段目に「体注」欄外の書入れと「玉篇大全」、「字林」
 の注文とが一致するか否かを示す。この欄の摘記とは、
 字書側の全ての注文を「体注」書入れ者が採っていない
 ことを示す。玉篇大全欄の頭注含むとは、「体注」の書
 入れに「玉篇大全」の頭注に含まれる注文が見えること
 を示している。
- ・十段目に「体注」欄外の仮名の異同等必要な注記を適宜
 示す。

18	中庸	オ4	イウ	カキル	墨	一致	頭注 摘記 各む	大全・字林イウ。書入れの音注朱
19	中庸	オ4	ヤ都	トスベテ ミ	墨	一致	頭注 摘記 各む	筆。全・字林イウ。書入れの音注朱
20	中庸	ウ6	ル譚	クワイ ヲシラ	朱	一致	一致	大全 ^ル 。全クハイ・ヲシユル。字林ヲシ
21	中庸	オ7	イ恠	クワイ アヤシ	朱	摘記	摘記	大全クハイ・アヤシ。字林アヤ
22	中庸	オ7	ア悔	ヲクワ クニル	朱	摘記	摘記	大全クハイ・ヲクナムル。
23	中庸	オ9	ホ是	ナホシ シヌナ	朱	摘記	摘記	大全・字林ナヲシ。
24	中庸	ウ9	ヲ了	ヲハレ ウアキ サカル	朱	不一致	摘記	
25	中庸	ウ9	倣	ソナス	朱	摘記	摘記	通番63と見出し同じ
26	中庸	オ01	ル陵	キリウ アナド	朱 不合	頭注 摘記 各む	摘記	大全に「体注」本文のシノク訓あり。
27	中庸	ウ01	ク援	ヒエン トルヌ	合	頭注 摘記 各む	摘記	大全・字林エン。
28	中庸	ウ01	ク寓	クヨル ヤド	朱	一致	一致	大全ク・ヤドル。字林ク。
29	中庸	オ31	船	イツグル	墨	不一致	摘記	大全ツグルなし。
30	中庸	オ51	稷	ヘラス ソク	朱	頭注 摘記 各む	摘記	
31	中庸	ウ51	夕惟	キオモ ヲタ	朱	不一致	摘記	大全イ・ヲモフ・タ。字林ヲモ
32	中庸	ウ51	班	ハン アエネク	朱	不一致	不一致	大全・字林アエネシ。
33	中庸	オ61	公御	イシヨク カチシ	朱	摘記	摘記	通番141と見出し同じ
34	中庸	オ61	祖	シヨ オコル	朱	摘記	不一致	字林オコルなし。
35	中庸	ウ61	夕親	タシム イタル	朱	頭注 摘記 各む	摘記	書入れの音訓墨筆。

54	論語	1	オ1	ル温	ノドカサス	朱	摘記	頭注含む	
55	論語	1	オ1	ル效	マナラフス	朱	摘記	頭注含む	大全マナフ。
56	論語	1	ウ1	檀	ウレフイカル	朱	不一致		大全・字林ウレフなし。
57	論語	1	オ2	拂	サカフミダス	朱	摘記	頭注含む	大全ミダス。
58	論語	1	ウ2	楚	シスナホ	朱	摘記		通番23と見出し同じ。
59	論語	1	ウ2	連	ムカフコノ	朱	摘記	頭注含む	通番41と見出し同じ。
60	論語	1	オ7	不敷	ハムキラスツ	墨	摘記	含む頭注	
61	論語	1	オ7	詔	ヘツラウ	墨	摘記		大全・字林ヘツラフ。
62	論語	1	オ8	コ環	ヤシヤウサカヒ	墨	摘記	頭注含む	
63	論語	1	ウ9	故	ナス作	朱	摘記		
64	論語	1	ウ9	僭	カリタカフ	朱	摘記		字林タカフ。
65	論語	1	オ01	リ苟	メシバラクカリ	朱	摘記	含む頭注	
66	論語	1	ウ01	ノ釋	クツオシムコノ	朱	摘記		大全ヲノク・オソル。字林オソ
67	論語	1	オ11	色	イロトル	朱	摘記		
68	論語	1	オ11	下輸	ルユロコフ	朱	摘記	含む頭注	大全イユ。
69	論語	1	オ11	ル婉	シタガウコヒ	朱	摘記		大全・字林シタガフ。
70	論語	1	ウ11	逃		朱	掲出なし		掲出なし
71	論語	1	ウ11	難	タガフソムク	朱	摘記		通番193と見出し同じ。

41 近代沖縄における字書利用の一例

72	論語	二故 コ カル ガ ユ エ	ウ11	オ2.1	ハ殆 メ タイ チ ア ヤ ウ シ	朱	摘 記	大全・字林カ ル ガ ユ エ ニ
73	論語		オ2.1	オ2.1	ハ殆 メ タイ チ ア ヤ ウ シ	朱	摘 記	大全・字林ハ ジ メ
74	論語		オ3.1	ウ3.1	ウ3.1	合	摘 記	
75	論語		ウ3.1	ウ3.1	ウ3.1	朱	摘 記	大全・字林ツ ン シ ム ナ シ
76	論語		ウ3.1	ウ3.1	ウ3.1	朱	摘 記	
77	論語		オ1.1	オ1.1	オ1.1	朱	摘 記	大全・字林 コ ソ ル
78	論語		オ1.1	オ1.1	オ1.1	朱	摘 記	
79	論語		オ1.1	オ1.1	オ1.1	朱	摘 記	大全 ス サ マ ジ
80	論語		ウ1.1	ウ1.1	ウ1.1	朱	摘 記	大全・字林 ツ ン シ ム ナ シ
81	論語		ウ1.1	ウ1.1	ウ1.1	朱	摘 記	大全・字林 ウ タ カ ク
82	論語		ウ1.1	ウ1.1	ウ1.1	朱	摘 記	不一致
83	論語		ウ1.1	ウ1.1	ウ1.1	朱	摘 記	通 番 4 5 と 見 出 し 同 じ
84	論語		オ2.2	オ2.2	オ2.2	朱	摘 記	大全 キ タ ラ ズ
85	論語		オ2.2	オ2.2	オ2.2	朱	摘 記	大全 セ ツ ミ タ リ 。字 林 ツ ン シ タ
86	論語		オ3.2	オ3.2	オ3.2	朱	摘 記	
87	論語		オ3.2	オ3.2	オ3.2	朱	摘 記	大全・字林 ユ ツ ル
88	論語		オ4.2	オ4.2	オ4.2	朱	摘 記	一致
89	論語		オ4.2	オ4.2	オ4.2	朱	摘 記	大全 ク ハ ツ シ 。字 林 ト ラ シ

90	論語	オ4	才選 フイ オヨ	オ4	才選 フイ オヨ	一致	大全・字林ヲヨフ・ヲフ。
91	論語	ウ5	シ訓 ハン クチガヤ	ウ5	シ訓 ハン クチガヤ	一致	大全エソ。
92	論語	オ6	ヤ腰 スエソ イコフ	オ6	ヤ腰 スエソ イコフ	一致	大全エソ。
93	論語	オ6	シ頰 ク ハン ワカッ	オ6	シ頰 ク ハン ワカッ	不一致	大全ワカッ・シクなし、字林ワカ ツなし。
94	論語	ウ6	キ枕 イウ ムナサフ	ウ6	キ枕 イウ ムナサフ	一致	大全・字林ムナサハギ
95	論語	ウ9	ス擗 ムイフ コヌヌク	ウ9	ス擗 ムイフ コヌヌク	一致	通番87と見出し同じ
96	論語	ウ0	儻 ケン ウラム	ウ0	儻 ケン ウラム	一致	通番2と見出し同じ。
97	論語	ウ1	オ釋 ヨソソ アツイタル	ウ1	オ釋 ヨソソ アツイタル	一致	大全ヲヨフ。
98	論語	オ2	忍 キ イカル	オ2	忍 キ イカル	一致	大全・字林ギ。
99	論語	ウ2	枉 王 マガル	ウ2	枉 王 マガル	一致	大全字林ワ。通番76と見出し 同じ。
100	論語	ウ2	儻 カン ウラム	ウ2	儻 カン ウラム	一致	
101	論語	オ3	シ宜 ギベシ ヨロ	オ3	シ宜 ギベシ ヨロ	不一致	字林ヲチツクルなし。
102	論語	ウ3	泛 ハン ウカラフ	ウ3	泛 ハン ウカラフ	一致	通番37と見出し同じ
103	論語	ウ3	コ渾 コシソ ナカクハ	ウ3	コ渾 コシソ ナカクハ	一致	大全通番37と見出し同じ。字林コ ホカ・ワ
104	論語	オ4	是 シ ナクシ	オ4	是 シ ナクシ	一致	通番23と見出し同じ
105	論語	オ4	カ頰 タシヨ ホメル	オ4	カ頰 タシヨ ホメル	一致	字林カタトル。
106	論語	オ5	ト靜 ベサ ルイサムル	オ5	ト靜 ベサ ルイサムル	一致	大全トメル。
107	論語	オ5	才選 タ スカソ イサムル	オ5	才選 タ スカソ イサムル	一致	大全カソのソ消え。

43 近代沖縄における字書利用の一例

108	論語	オ5.1	タ悦ノシエツヨロコブ	一致	朱	一致	字林エツ。
109	論語	オ5.1	ビ移ヤカスオヨルオ	不一致	朱	不一致	子通番2.0.9と見出し。字林ホし同し。大全オ
110	論語	ウ5.1	ウ矩クマガリイ	不一致	朱	不一致	
111	論語	ウ5.1	ウイ肩スリギセツツハシムクダクム	一致	朱	頭摘注記含む	字林スリクツ。
112	論語	ウ3	ウ3ウ忽スルコツタチマチ	一致	朱	摘記	
113	論語	オ4	オ4オ悟オホヒカウサカソ	一致	朱	摘記	大全オカソナリ。字林サカソナリ。オホヒナリ。
114	論語	オ4	オ4ト投ムシハガアツツ	不一致	朱	不一致	大全。字林アツツ。ハガアツツ。
115	論語	ウ5	ウ5ウ蓋シオクリナ	一致	朱	掲出なし	
116	論語	ウ7	ウ7ウ儻センイツワル	一致	朱	摘記	大全。字林イツハル。
117	論語	ウ7	ウ7ウ輝サウヤヤ	不一致	朱	不一致	
118	論語	オ8	オ8ウ角クカクアソソ	一致	朱	頭摘注記含む	大全ウカラソ。字林カソ。
119	論語	オ8	オ8ウ狂ルヒキヤウニクモノク	不一致	朱	頭摘注記含む	オニクモノク。ルヒキヤウ。コ、ロクク。字
120	論語	ウ8	ウ8オ亦ケオイツク	一致	朱	摘記	大全オオイツク。オホヒナリ。字林オ
121	論語	ウ8	ウ8ア蹶キリヤウマコト	一致	朱	頭摘注記含む	
122	論語	ウ8	ウ8オ狗ヌコウフムサホル	不一致	朱	不一致	字林ムサホル。クルフなし。
123	論語	ウ8	ウ8ル猿リヤクカスム	一致	朱	摘記	
124	論語	ウ8	ウ8市シタハム	一致	朱	頭摘注記含む	
125	論語	オ9	オ9媚ビコベル	一致	朱	摘記	

45 近代沖縄における字書利用の一例

144	論語	オ02	乃	ヲサムル	—	朱	摘記 頭注含む	
145	論語	オ1	三訓 チビク クン	ヲシヘル	—	朱	摘記 頭注含む	大全・字林ヲシユル。
146	論語	ウ2	不僻 ヤヘキ ヒカム		4	朱	摘記 頭注含む	
147	論語	オ3	方體 クワツ トホツ ル	ホコラ	4	朱	摘記 頭注含む	大全ガハツ、ホカガ ホザカ、トカガ、 ホカ、トマル字
148	論語	ウ3	下幾 ヌチカシ シホトシ		4	朱	摘記 頭注含む	字林スクナシ。
149	論語	ウ4	ル逐 オツ シリソク		4	朱	摘記	あり。大全に「字林ヲフ・シリソク 本文のチク訓
150	論語	ウ5	ヨ折 ロキン アキラカ		4	朱	一致	
151	論語	オ7	ル疾 アセキ アタタム		4	朱	不一致	大全字林アタタムルなし。
152	論語	オ8	子懸 クキ ヤススル		4	朱	摘記	字林。
153	論語	ウ8	ヲ祭 ソダ イカシ		4	朱	摘記	
154	論語	ウ8	ク却 キヤク シリソ		4	朱	摘記	大全シリソク。通番36と見出し 同じ。
155	論語	ウ8	敷 ソ ナス	作	4	朱	摘記	大全、字林は作とする。通番63と 見出し同じ。
156	論語	ウ8	ヤ便 スヘソ チカソク		4	朱	不一致	大全、字林ヘソ。ヤスシなし。
157	論語	オ9	ク講 ルキ カクスサ		4	朱	摘記	大全・字林キ。
158	論語	ウ9	ア掛 ソムル コナスク		4	朱	摘記 頭注含む	大全・字林アツル。
159	論語	ウ9	サ遮 クソソ ノガル		4	朱	摘記 頭注含む	
160	論語	オ11	作 サク ハツル		4	朱	摘記	大全サ。字林ハツルなし。
161	論語	ウ11	シ殺 バカ ウ マトル		4	朱	摘記 頭注含む	大全マトル。字林マトル。

198	論語	ウ6	ナ臣 ルハ ウナ ナラフ	朱	墨	頭 摘 注 各 む	不一致	字 林 ナ ル ハ ナ シ。
199	論語	ウ7	詭 アザムク	朱	朱	摘 記	不一致	大 全 ア サ ム ク。
200	論語	ウ9	傲 オボル	朱	朱	摘 記	不一致	大 全 ア コ ル。通 番 2 2 4 と 見 出 し
201	論語	ウ11	ト コ ソ ン ナ カ ル	墨	墨	頭 摘 注 各 む	不一致	大 全 ト カ。字 林 ク ホ カ。
202	論語	ウ21	倅 カウ サ イ ハ イ	墨	墨	摘 記	不一致	大 全 サ イ ハ イ。
203	論語	ウ81	不 愾 カ ル キ ヨ オ コ ル	墨	墨	不一致	大 全 ア カ ル ナ シ。	
204	論語	ウ22	不 悽 タ ム セ イ カ ナ シ ム	墨	墨	摘 記	不一致	
205	論語	ウ22	不 愾 ウ シ ヨ ウ イ タ ム	墨	墨	頭 摘 注 各 む	不一致	大 全 シ ヤ ウ ア ハ ナ ル。字 林 シ ヤ
206	論語	ウ6	阿 ア カ ル	朱	朱	摘 記	不一致	
207	論語	ウ7	不 慝 ス ナ ラ ツ シ	朱	朱	摘 記	不一致	大 全 ス ナ ラ ツ シ。
208	論語	ウ21	媚 コ ビ ル	朱	朱	摘 記	不一致	通 番 1 2 5 と 見 出 し 同 じ。
209	論語	ウ31	修 オ コ ル ユ タ カ	朱	朱	摘 記	不一致	大 全 オ コ ル ナ シ。字 林 ホ コ ル。
210	論語	ウ51	不 厭 ク ニ ツ カ ミ ヤ	朱	朱	頭 摘 注 各 む	不一致	
211	論語	ウ51	立 カ タ シ タ ツ ル	朱	朱	頭 摘 注 各 む	不一致	
212	論語	ウ1	黜 ア カ ル	朱	不 合	摘 記	不一致	大 全 に 一 体 注 本 文 の ク ツ 訓 あ
213	論語	ウ4	不 薄 ク レ ト ウ ヤ ラ ル	朱	朱	不一致	不一致	
214	論語	ウ5	不 朝 ハ ツ ラ ツ セ ト ル	朱	朱	不一致	不一致	大 全 モ ト ル ハ ツ ル。
215	論語	ウ9	悲 ヒ ウ タ カ ウ	朱	朱	不一致	不一致	大 全 モ ト ル ハ ツ ル。 大 全 ・ 字 林 ウ

49 近代沖縄における字書利用の一例

216	論語	216	朱	摘記	大全・字林。通番207と見出し同じ。スナホ。
217	論語	217	朱	摘記	大全。スナホ・ホシヒヤ、字林ツ
218	論語	218	朱	摘記	大全。スナホ。
219	論語	219	朱	摘記	通番139と見出し同じ。
220	論語	220	朱	摘記	字林。オサキヨシ。通番111と見出し同じ。
221	論語	221	朱	不一致	
222	論語	222	朱	摘記	大全・字林ミダル。
223	論語	223	朱	一致	大全リヤウ。
224	論語	224	朱	摘記	大全カウ・ラコル。
225	論語	225	朱	不一致	大全に「体注」本文のヤウ訓なし。
226	論語	226	朱	摘記	
227	論語	227	朱	摘記	
228	論語	228	朱	摘記	大全字林クツル。
229	論語	229	朱	摘記	通番194と見出し同じ。
230	論語	230	朱	摘記	大全シユツ。
231	論語	231	朱	不一致	
232	論語	232	朱	不一致	大全・字林ヤウラクなし。
233	論語	233	朱	摘記	字林ヲホヒナリ。
216	論語	216	朱	摘記	大全・字林。通番207と見出し同じ。スナホ。
217	論語	217	朱	摘記	大全。スナホ・ホシヒヤ、字林ツ
218	論語	218	朱	摘記	大全。スナホ。
219	論語	219	朱	摘記	通番139と見出し同じ。
220	論語	220	朱	摘記	字林。オサキヨシ。通番111と見出し同じ。
221	論語	221	朱	不一致	
222	論語	222	朱	摘記	大全・字林ミダル。
223	論語	223	朱	一致	大全リヤウ。
224	論語	224	朱	摘記	大全カウ・ラコル。
225	論語	225	朱	不一致	大全に「体注」本文のヤウ訓なし。
226	論語	226	朱	摘記	
227	論語	227	朱	摘記	
228	論語	228	朱	摘記	大全字林クツル。
229	論語	229	朱	摘記	通番194と見出し同じ。
230	論語	230	朱	摘記	大全シユツ。
231	論語	231	朱	不一致	
232	論語	232	朱	不一致	大全・字林ヤウラクなし。
233	論語	233	朱	摘記	字林ヲホヒナリ。

〔紹介〕

和泉悠著『悪い言語哲学入門』

高田 樹

私たちが普段何気なく使う言葉にも、悪い言葉が潜んでいる。では、その言葉はどこが悪いだろうか。さらには、どうしてあの言葉はいいのにこの言葉はダメなのだろうか。本書では、言語哲学、意味論を専門としている著者が、そのような問いに対して読者と共に考え、言語についての理解を深めていく。章立ては、次の通りである。

第一章 悪口とは何か——「悪い」言語哲学入門を始める

第二章 悪口の分類——ことばについて語り出す

第三章 てめえどういう意味なんだこの野郎？——「意味」の意味

第四章 禿頭王と追手内洋——指示表現の理論

第五章 それはあんたがしたことなんや——言語行為論

第六章 ウソつけ！——嘘・御誘導・ブルシット

第七章 総称文はすごい

第八章 ヘイトスピーチ

第一章では、悪口の条件、悪口には謎があることを確認している。悪口については、単に害の有無について焦点を当てるだけではなく、言葉自体の中身について考えなければならぬ。つまり、「人を傷つける」ことが悪口の条件とは限らない。そして、「なぜ特定の表現が悪く他が悪くないのか」という謎について、「外国人」と「外人」の違いという例をあげながら確認している。

第二章では、悪口を分類するやり方を考えることによつて、どの観点から捉えればいいのかを説明している。悪口は、内容にもとづいた分類、形にもとづいた分類、行為による分類の三つに分類できる。著者は、筒井康隆、山本幸司らの本を例にあげつつ、多様な現れを持つ悪口を、行為の観点から検討しなければいけないと説明している。

第三章では、「意味」の意味とは何なのか、という疑問

をもとに、意味の多様性が、悪口の多様性にも繋がっていることを確認している。

第四章では、固有名や確定記述などを例にあげ、他の言語と比較しながら、日本語の表現に焦点を当てている。定冠詞がある英語の確定記述に比べ、定冠詞がない日本語の確定記述は非論理的であるという憶測が述べられることがある。著者はそれに対し、無冠詞であるラテン語で著述したキケロを例にあげ、無冠詞だから非論理的ということはありえない、と述べている。

第五章では、罵りがいつ軽口になるのか、という問いに対して検討している。お互いに信頼関係が確立され、私たちは対等な仲間である、ということが明確なら、罵りとしては解釈されず、軽口として捉えられる。権力の序列関係が発言の評価に決定的な影響を与える。

第六章では、嘘という「悪い」言語の代表例を取り上げ、関連する概念とともに検討している。著者は、嘘には、心理条件を持った平叙文を使わなければいけないという縛りはないと述べている。

第七章では、総称文の取り扱いについて、注意点を述べている。総称文は極めて単純な構文で、ヒトの認知システムがもたらす判断の基本的な形式を反映している。著者は、私たちが持つ社会集団についてのステレオタイプ、あ

るいは偏見を表明している可能性がある」と述べている。

第八章では、ヘイトスピーチについて説明し、言語哲学の観点からいくつか論点を提示している。ヘイトスピーチとは、人種や民族といった属性にもとづいて、個人や集団を貶め、攻撃する表現である。そして、ヘイトスピーチの概念、怒りと憎悪の区別をアリストテレスなどの『弁論術』を例にあげつつ分析している。

言語を日常的に使っているものとして、言葉の善悪の区別はつけておきたい。同じ人間同士、お互い理解し、うまくやっていこうとするのが、言葉を使う上で重要なことである。人を傷つける言葉だけが悪口とは限らない。お互いの序列関係により、言葉の善悪が変わる可能性もある。常にお互いの距離を見極めながら、適切な言葉選びをすることが大切である。今まで何気なく言葉を使っていた人は、この本を通じて、言語についてより深く洗練された理解を深めてみてはどうだろうか。

(筑摩書房(ちくま新書164)、二〇二二年二月、二四七頁、
八四〇円+税)

(たかだ・いつき 本学日本語日本文学科一年)

〔紹介〕

篠崎晃一著『それいけ！方言探偵団』

沼野綾里

子供の頃、江戸川乱歩の「少年探偵シリーズ」にはまり、友人たちと放課後寄り道をしながら遊びに適した変わった地形の場所を探索したり面白い景観を発見したりするといった、少年探偵団を結成した作者。それから数十年、今では、団長兼団員として日常にさりげなく潜む方言を掘り起こしたり、方言であることに気づかずに使っている事例を見つけたりと、探偵団の仕事も変わってきたという。

そんな作者が著した本書には、全国各地の方言が載っている。例えば、私の地元、静岡県。本文には、「がんこ」「アメーラ」「ぐれる」「ごせつぱい」「ちんぷりかえる」「ぱっか」「らんごく」の七つが載っている。静岡の方言といえど、私は西部の浜松市出身であるため「ちんぷりかえる」「ぱっか」「がんこ」の三つしか知らなかった。西部で使われているという「らんごく」は聞いたことが無い。「アメーラ」や「ぐれる」といった言葉も、どれ程使われていて、どれ程有名なのか、もしくは全く使われていないのかとても気

になった。生まれ育った静岡県だが、方言だけでも知らないことが多かったため、まだまだ知らないことが多いはずだ。県内の様々な地域の文化や特色、名産品などについても知りたいと思うきっかけとなった。

そして、この本書の中で私が一番驚いたことは、東京にも方言があるということだ。本書には五つの方言が載っている。その中で「かつたるい」「うざったい」「べらぼー」の三つは東京の人だけでなく、全国の人々が知っている言葉だろう。若者が使っているイメーজのあるこの言葉も元は東京で使われていた伝統的な言葉らしい。このように全国で知られていたり、使われたりしている言葉は、方言と言えるのか。少し調べてみたところ、方言とは、共通語・標準語とは異なった形で、一地方だけで使われる語とのことだった。一見、「かつたるい」・「うざったい」などの全国で使われている言葉は方言でないかのように思うかもしれないが、これらは、本来東京で使われていた時と、全国

で使われている今とでは、意味が少し違う。そのため、東京で本来使われていた方は、方言と呼べる。逆に、意味が少し変わり、現在多く使われている方は、新しい言葉と考えればいいだろう。

この他にも、西と東で呼び方が違うものについてや、面白い方言について著されている。静岡県内でも呼び方の変わるものや、通じないものなどがあるため、一人ではもちろん、同じ静岡県出身の人やほかの県の出身の人と読んでも楽しめるだろう。

(平凡社(平凡社新書993)、二〇二二年十二月、二八〇頁、
八四〇+税)

(ぬまの・あやり 本学日本語日本文学科二年)

洋思想』を出版した³。「概観日本造船史」は、『日本民族と海洋思想』のダイジェストに、造船技術の話題を加えたものであると言えよう。木宮はどこかの組織や機関から要請を受けて「概観日本造船史」を書いたのかもしれない。

木宮は「日本震災史概説」（1923年）、『日支交通史』（1926-1927年）、『日本古印刷文化史』（1932年）、『日本喫茶史』（1940年）、『日本民族と海洋思想』（1942年）、『日華文化交流史』（1955年）を著しているように、古代から近世までの日本の歩みを概括するのがとても上手い。「概観日本造船史」も他の著作と同じく、日本の歴史を造船に即して概括している。造船技術の歴史的展開を理解できるとともに、例えば日本における主要な港の遷移もたどれる。すなわち、古代以来長らく難波や瀬戸内海沿岸だったものが、江戸時代とりわけ幕末になると江戸湾になったのである。木宮が静岡県人だからなのか、上古に遠江が、幕末に伊豆がそれぞれ話題に出てくる。

とはいえ、「概観日本造船史」は歴史学者が書いたものであり、造船の専門家が書いたものではない。波動や力の伝導というような技術面についてほとんど言及がない。また、蒸気機関の出現に触れていない。『技術評論』の読者は、木宮の概説に満足できたのだろうか。ちなみに、日本船舶海洋工学会が参考文献を紹介しているものの⁴、「概観日本造船史」は挙がっていない。

注

- 1 木宮泰彦「概観日本造船史（上）」、『技術評論』19:9 =235（東京：日本技術協会、1942年8月）、p.48-51。および、木宮泰彦「概観日本造船史（下）」、『技術評論』19:10 =236（東京：日本技術協会、1942年9月）、p.44-47。
- 2 「国立国会図書館デジタルコレクション」（<https://dl.ndl.go.jp/pid/1502946>）および <https://dl.ndl.go.jp/pid/1502947>）。
- 3 木宮泰彦（著）、日本文化中央聯盟（編）『日本民族と海洋思想』東京：刀江書院、1942年1月。
- 4 「日本船舶海洋工学会デジタル造船資料館」（<https://zousen-shiryoukan.jasnaoe.or.jp/item/>）。

（わかまつ・だいすけ 常葉大学外国語学部准教授）

(7)

文禄（1592～1596年）のころには、朱印船（商船）と並んで兵船も建造された。毛利氏は中国地方の覇者となった。これは、毛利氏が海を掌握していた村上氏と結託していたため、有利に戦局を進められたからである。村上氏が所有する船にはスクリュー・プロペラを搭載した。実用性があったかは分からないけれども、スクリュー・プロペラの使用が、日本は欧米よりも百数十年早い。

(8)

戦国時代に商船（朱印船）や兵船が登場したころ、西洋から帆船が舶来し、日本でも帆船を建造する。慶長五年（1600年）にはオランダ船が豊後海岸に漂着した。乗組員のウィリアム・アダムズは徳川家康の信用を得て、大いに用いられて造船にも関わった。その後、前ルソン提督のドン＝ロドリゴも上総勝浦に漂着した。徳川家康は、この時期にメキシコとの貿易を開始した。慶長一五年（1610年）には日本船がアメリカ大陸へ到るのである。

(9)

キリスト教の伝播を防ぐために、江戸幕府が寛永一〇年（1633年）に鎖国を始める。五百石以上の船を破壊し、日本において造船をやめた。ペリーの来航（嘉永六年、1853年）に刺激され、幕府は大型船の建造を再び始める。併せて、諸大名も大型船を造船していく。

安政元年（1855年）、ロシアからの使節であるプチャーチンが通商条約の締結および樺太の境界問題の解決のために来日した。幕命によりプチャーチンは伊豆に逗留したところ、大地震により船が壊れる。プチャーチンは幕府の援助を受けつつ、船工を募集し西洋式で船を君沢郡戸田（heda）で建造した。日本の職人がロシア船の補修を担当し、欧式造船の君沢型が日本（伊豆）に誕生したのである。君沢型の造船に参加した人々が後に横須賀などで就業し、近代日本の造船を開いていく。

二、読後感

「概観日本造船史（上）（下）」は1942年8月と9月に『技術評論』という雑誌に掲載された論文である。前年末の1941年12月8日には真珠湾攻撃があり、日米が開戦する。木宮は海軍からの要請を受けて、1942年1月に『日本民族と海

(4)

室町時代には商船だけでなく、海賊船も活躍した。明は海賊船に大いに迷惑し、勘合貿易を始める。遣明船は、兵庫から瀬戸内海を通過して博多に寄港し、五島經由で寧波を目指す。これを中国路と呼ぶ。応仁の乱後は、中国路とは別に、堺から四国の南側を抜けて薩摩の坊津へ寄港し、寧波を目指す。これを南海路と呼ぶ。

室町時代の日明貿易での勘合船は、(想像して書画で描かれたものよりも)実に盛大な船だった。大きな船でないと、短期間で大量の物資を運べないからである。日本で造船したようである。ただし、どのような技術的背景があったのかを、木宮は述べていない。

(5)

鎌倉時代から戦国時代にかけて、九州西北の人々が半島や大陸の沿岸をしばしば襲った。これが倭寇である。倭寇は南方進出の先駆けともいえるべきもので、南方進出を目的とした貿易船であると理解できる。桃山時代から江戸初期の朱印船も、倭寇の流れを汲む。倭寇の活動範囲は、朝鮮や江蘇・浙江あたりから福建・広東まで広がり、活動時期は多くが季節風の関係で春や秋である。ただし、倭寇がどのような船を使っていたのかは、明確には分からない。新しい日本の造船技術は、中国の造船技術と異なるようで、遣明船も倭寇の船も同じようだったという。

(6)

戦国時代の倭寇は日本による南方進出を大いに展開した。豊臣秀吉の頃、文禄元(1592)年に朱印船の制度が定められた。京都・堺・長崎の商人を選定し、渡航を許可した。これが朱印船の始まりである。朱印船は前後して、荒木船・末次船と、末吉船・角倉船とに二分できる。江戸幕府もこれにならい、踏襲した。ただし、許可を受けたものは商人に限らず、大名、在留中国人、西洋人もいた。貿易の相手は漳州・阿媽港(マカオ)・台湾・ルソン・モルッカ・トンキン・安南(アンナン)・交趾(コーチ)・占城(チャンパ)・柬埔寨(カンボジア)・暹羅(シャム)・マラッカ・ボルネオ・ジャワ等、広範囲に及ぶ。

ちなみに「六」は2ページにわたり説明が続き、本論文(全8ページ)の中で分量が最も多い。1/4を占める。

共栄圏を充実させていかなければならない。そういった時局の下、筆者（木宮）は船舶の増強のために、過去三千年の我が国の造船史を振り返るのだという。

(1)

日本は海国である。自ずから「海洋思想」（海に関する知識）を古来より育んできた。それは、記紀（『古事記』と『日本書紀』）の登場人物からも察することができる。記紀には船の名称が様々に見えており、葦舟以外は全て一木を削った船であったという。上古の日本に新羅からの渡来人があった。彼らは猪名部と呼ばれ、摂津（武庫）で造船し、日本の造船技術に画期をもたらし、大いに発展させた。

(2)

遣隋使と遣唐使は、港に難波を使用した。難波から瀬戸内海を通して博多へ寄港し、博多から大陸へ向かうには北路と南路があった。北路は対馬から済州島あたりを通り、黄海を横断するか、朝鮮半島西岸に沿うかして、山東半島の一角に上陸するコースである。南路は屋久島辺りを通り、揚子江付近に上陸するコースである。北路は遣隋使と初期遣唐使が使用し、南路は奈良時代の遣唐使が使用した。

同じ南路でも、平安時代の遣唐使は五島から直接大陸へ向かうコースを採った。平安時代には遣唐使が長い距離を渡り、東シナ海を横断できるほど、造船技術が発達したのである。とはいえ、船体に縦通力が無いために前後で折れたり、固定した帆のために順風を待たなければならなかった。造船技術の発達については、船図が現存せず、現存する絵巻の類では証拠に位置付けにくい。しかしながら、平安時代の遣唐使は、一回につき五～六〇〇人が四艘の船で大陸を目指したという。このことから、船の大きさの大体を想像することができる。

(3)

遣唐使の廃止後、日中間は大陸からの船が往来するだけになった。平安末期から鎌倉期にかけて、武士が台頭すると再び貿易が始まる。平安末期以来の日宋貿易、続く日元貿易が盛んになり、造船技術も向上した。ただ、この時期の船の様子ははっきり分らない。造船の技術は、南中国の船、つまりジャンク船（戎克船）を模倣したようなものだったという。当時、東シナ海を渡るのに数十日もかからず、一～二週間ですんだ。これは航海術の進歩と船のサイズによる。

木宮泰彦著「概観日本造船史」の概要

若松大祐(編)

はじめに

木宮泰彦(1887-1969年)には「概観日本造船史(上)(下)」(1942年8月および9月)¹という論文がある。そもそも木宮の主著である『日本古印刷文化史』(1932年、約700ページ)や『日華文化交流史』(1955年、約800ページ)は、文字通りの大著である。「概観日本造船史」はわずか8ページであるとはいえ、主著に載らない事実も記載している。本稿は「概観日本造船史」の内容を把握すべく、同論文の概要を記す。なお、この概要は、2023年度の常葉大学共同研究「木宮泰彦の学問的到達点：本学歴史資料館蔵資料の整理と研究」に基づく読書会(2023年9月19日(火))で参加者(若松大祐、中野直樹)の作成したレジュメを、統合して作成した。

ちなみに、国立国会図書館が2022(令和4)年5月19日から、「個人向けデジタル化資料送信サービス」の提供を開始した。これに伴い、「概観日本造船史」が個人送信資料として、国立国会図書館デジタルコレクションで容易に閲覧できる²。

一、各節の概要

「概観日本造船史」は上下4ページずつの合計8ページからなり、9つの節を持つ。ここでは、9節の概要を記そう。原文では各節に漢数字が振られているだけで、節題はない。本稿では節の番号を漢数字からアラビア数字に変換した。

木宮は各節において、まず歴史的背景、次に造船の根拠となる資料、そして造船技術についてそれぞれ述べる。とはいえ、こうした書き方が各節で徹底されているわけではない。

(序)

半年前の1941年12月に大東亜戦争が始まり、新建設事業を推し進め、大東亜

61 エピグラフ（引用文）のコミュニケーション・ツールとしての機能性に関する研究(3)

Hispánicos, 16(2), 219-234. <http://www.jstor.org/stable/27762900>

Huxley, A. すばらしい新世界. 黒原敏行訳. 光文社, 2013, 433p.

Kaufert, D. (1977). Irony and Rhetorical Strategy. *Philosophy & Rhetoric*, 10(2), 90-110.
<http://www.jstor.org/stable/40237017>

Myers, G. (1990). The Rhetoric of Irony in Academic Writing. *Written Communication*, 7(4), 419-455. <https://doi.org/10.1177/0741088390007004001>

(なか・はじめ 常葉大学教育学部准教授)

Gutenberg <https://www.gutenberg.org/files/3255/3255-h/3255-h.htm> 参照
日：2024-01-30)

参考文献

那珂元 . (2020). エピグラフ (引用文) のコミュニケーション・ツールとしての機能性に関する研究 (1) ジェラルド・ジュネットのパラテキストとしてのエピグラフの定義の整理を中心として . 常葉国文, 35, 1-17.
<https://doi.org/10.18894/00002222>

那珂元 . (2021). エピグラフ (引用文) のコミュニケーション・ツールとしての機能性に関する研究(2): 現代のジャンル小説におけるエピグラフ実践に関する研究一. 常葉国文, 36, 左 1- 左 15. <https://doi.org/10.18894/00002265>

Booth, W. C. (1974). *A rhetoric of irony*. University of Chicago Press.

Booth, W. C. (1983). The Empire of Irony. *The Georgia Review*, 37(4), 719-737. <http://www.jstor.org/stable/41398584>

Bowen, D. (1995). The Riddler Riddled: Reading the Epigraphs in John Fowles's "The French Lieutenant's Woman." *The Journal of Narrative Technique*, 25(1), 67-90. <http://www.jstor.org/stable/30225424>

Fowles, J. *The French lieutenant's woman*. Little, Brown, 1969, 467p.

Genette Gérard. スイユ：テキストから書物へ . 和泉涼一訳 . 水声社 , 2001, 543p., (叢書記号学的実践 , 20) .

Griffin, J. A. *Common and uncommon quotes: a theory and history of epigraphs*. Vernon Press, 2023, xiv, 260p.

Hutcheon, L. (1992). The Complex Functions of Irony. *Revista Canadiense de Estudios*

や特定のアイロニー的な引用に対する感じ方の仕方によって、多かれ少なかれギャップがある可能性があるため、執筆者が意図したとおりのアイロニーのシグナルを読者に正確に送ることに制約がありうるのだ、と指摘している（Myers, 1990, p.449）。

アイロニーとしてのエピグラフの機能は、文脈化と社会的相互作用の過程をとおして、著者と読者、エピグラフと本テキスト、暗示された意味と現実世界の意味との間のギャップ、境界、あるいは距離を否応なく生み出す。考えられる今後の研究課題として、①エピグラフの受容者が、一体どのような社会的な期待を持つ傾向にあるのか、②受容者がエピグラフを介してアイロニーのシグナルをどのように捉え、理解し、また解釈するのか、③エピグラフ受容者が持っている社会的文脈を考慮するとはどういうことなのか、④アイロニーとしてのエピグラフに接した際に、受容者はエピグラフのなかに込められた暗示的な意味に対して、一体どのような喜びを感じるのか否か、さらに、⑤受容者のエピグラフに対する感受性は、受容者の既知の知識や体験、記憶と一体どのように関わっているのか、また感受性は、受容者の読書行為にどのような影響を及ぼすのか、など、さまざまな視点から、エピグラフの受容の効果や作用について、さらに検討する必要がある。

注

- 1 Huxley, A. すばらしい新世界. 黒原敏行訳. 光文社, 2013, 433p. より転記した。「ユートピアはかつて考えられていたよりもずっと実現可能なように思える。われわれは今、従来とはまったく異なる憂慮すべき問題に直面しているのだ。ユートピアが決定的に実現してしまうのをどう避けるかという問題に……。ユートピアは実現可能である。社会はユートピアに向かって進んでいる。おそらく今、新しい時代が始まろうとしているのだろう。知識人や教養ある階層が、ユートピアの実現を避け、より「完璧、でない、もっと自由な、非ユートピア的社会に戻る方法を夢想する時代が。——ニコライ・ベルジャエフ」
- 2 Huxley, A. すばらしい新世界. 黒原敏行訳. 光文社, 2013, 433p. より転記した。
- 3 この *The Riddle* と題された二連綴りの詩は、トーマス・ハーディ (Thomas Hardy) が 1971 年に出版した詩集 *Moments of Vision and Miscellaneous Verses moments of vision* の 38 頁に掲載されている。(参照元: The Project

者の持っている社会的文脈（「同時代性」）を考慮した上で、読者との関係性を構築していこうとする、精緻な戦略上の姿勢が求められる。

答え：

本研究では、妥当かどうかの判断ができない。

本研究で分かったことは、「著者が読者のエピグラフに対する期待や感受性、あるいは読者が持っている社会的文脈を考慮に入れずに、精緻な戦略上の姿勢でエピグラフを実践した場合には、エピグラフを介した著者・読者間のコミュニケーション上のミスマッチが起こる可能性があること」であり、また、「読者に対して、著者のアイロニーとしてのエピグラフの意図が有効に機能するのは、“期待された読者”が、著者の本来の意図の文脈的意味を変えることなく、エピグラフから有効なメッセージやシグナルを受け取ることができる場合に限られる」ということである。

今後の課題

本研究から見出された知見は、エピグラフを介した著者・読者間のコミュニケーションにおいて、著者の意図、メッセージ、あるいはシグナルが読者に明確に伝わるか否かといったエピグラフの効果を評価するためには、エピグラフを受容する側の読者の理解や解釈のメカニズムの解明が今後の課題として求められている、ということである。エピグラフ研究の領域においては、すでに一部の研究者が、エピグラフの受容側（文学作品の場合には、読者である）がどのようにエピグラフを捉え、理解・解釈し、そして本文テキストの“読み”に繋げていくのか、という受容者側の視点から、エピグラフの機能性を分析、整理している。例えば、Griffin (2023) は、Iser、Booth、およびRabinowitzといった先行する研究者の主張や考えを援用しながら、エピグラフの機能について、1) エピグラフは読者に読まれる。またエピグラフの意味は読者の意味づける機能の産物である、2) エピグラフには修辭的な機能がある。また、テキストと読者の間の“距離”を複雑にするエピグラフの状況は、著者のコントロールの問題とも関わる、および3) エピグラフは美的体験の表現である。実際に、エピグラフィーは芸術である、の三つの核となる仮説を示している。また、イギリスの修辭学者であるMyers (1990) は、アカデミック・ライティングの文脈におけるアイロニーとしてのエピグラフを用いる際の問題点の一つとして、執筆者と読者の間には、“社会的な文脈化”

う感覚）が比較的少ないにもかかわらず、（実践上の効果については）異なる評価の可能性がある。（Hutcheon, 1992）

<文学作品におけるアイロニーとしてのエピグラフの効果>

- アイロニー的な反転が起こりうる、ということを読者に対して知らせる最も明確な手がかりとなることがしばしばある。（Booth, 1974）
- アイロニーとしてのエピグラフを冒頭におくことで、まず本文に先行してアイロニーの意図を読者に対して伝えて、そのまま著者のアイロニーの意図を維持しながら本文に対する読者の理解へ繋げていく効果がある。（Booth, 1974）

<文学作品におけるアイロニーとしてのエピグラフ効果の問題点>

- 著者が修辞学的なアイロニーの機能や効果にこだわり巧妙な戦略性をもってエピグラフを用いた場合には、それが著者・読者間の意思伝達上の阻害要因となる場合もある。（Bowen, 1995）

<これらのレビューの整理した結果から見出せる結論>

本研究が行なった文献レビューの整理の結果に基づき、本研究が設定した二つの問いに対する答えを以下に記す。

問い①：

先行する研究（那珂, 2021; 2022）で見出された「発信者（著者）と受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題」がエピグラフ研究の領域のなかでどの程度議論されているか。

答え：

アイロニーの効果の問題点は多くの議論が確認できたが、エピグラフ研究の領域のなかでは、一部を除いて、ほとんど議論がないことがわかった。

問い②：

ミスマッチの問題を解決するための仮説が妥当な解決策か。

（仮説）

エピグラフを介した発信者（著者）・受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題を解決するためには、著者にはエピグラフを用いる際の読

者との関係性を構築していこうとする、精緻な戦略上の姿勢が求められる」(那珂, 2021) という仮説を検証するため、修辞法としてのアイロニーの機能と効果、およびアイロニーとしてのエピグラフの機能および効果について、文学理論研究やエピグラフ研究の領域における幾つかの議論のレビューをとおして、どの程度議論されているか否かを確認すると同時に、仮説の妥当性を考察することであった。

以下に、レビューの結果を記す。

<アイロニーの機能性>

- 表面的には正反対のことを表現しているように見える言葉を使って、自分の意図する意味を表現することである。(Oxford Dictionaries Online)
- アイロニーの機能は、否定という手続きを踏むことで有限性という現実を暴くことである。(Booth, 1983)
- アイロニーにおけるこれらの異なる意味のレベルが、否定の操作によって関連していることである。(Kaufer, 1977)
- アイロニーの実践者 (ironist) が生み出す意味のレベルを互換性のないものにする事である。(Kaufer, 1977)

<修辞的なアイロニーの効果の問題点>

- 聴衆は、そのモダリティの状態 (文字通りの意味、アイロニーとしての意味、嘘の意味) を解釈するために、文脈の手がかり (例えば、非言語的なシグナル) を参照しなければならない。(A Dictionary of Media and Communication)
- 一部のアイロニー実践者にとっては、そのアイロニーの機能としての“絶対的否定”の原理が人生の究極の真理になってしまう可能性もある、とした上で、そのような人がアイロニーを実践すると、その結果、虚無主義や絶望に繋がってしまう可能性がある。(Booth, 1974)
- 聴衆 (an audience) は話し手 (the speaker) の発言を処理する際に、高度に構造化された推論パターンを通過する必要がある。(Kaufer, 1977)
- 不必要な複雑さや不確かさという点での曖昧性が、誤解や混乱、あるいは単にコミュニケーションにおける明瞭さの欠如につながる。(Hutcheon, 1992)

<アイロニーの機能性および効果の評価>

- Critical edge の感覚 (アイロニーの機能の定義がわかりにくく、複雑だとい

同じ（文脈上の）レベルで共存していないからである」（Bowen, 1995）と説明している。さらに、Bowen（1995）は、著者であるファウルズに対する読者の不信や疑念によって、著者による読者に対するコントロールの低下が生じてしまうのだ、と説明している。

もちろん、ファウルズはテキスト性との戯れにおいて、詩のなかより見出した理解を好きなように利用する自由はある。しかし（そのようなファウルズの批評的な興味は）、批評的な距離を明確に置こうとする小説テキストを書く際には、読者に対する著者のコントロールが奪われてしまう可能性を孕んでいる。読者は、ファウルズが用いたエピグラフの逸脱的な可能性を認識することで、ファウルズの意図を弱体化するかもしれない。さらに、（省略）本文との間にアイロニーで謎めいた関係性を持つ（ハーディの）エピグラフは、すでに言葉で表されているものに対する不信感を醸成し、文脈の力を強調している。（Bowen, 1995）（英語の原文を那珂が翻訳した。）

Bowen（1995）のアイロニーとしてのエピグラフの効果に対する理解は、著者が修辞学的なアイロニーの機能や効果にこだわった巧妙かつ精緻なエピグラフ実践の戦略性が、かならずしも読者との間の意思伝達にポジティブな効果を与えるとは限らず、それとは反対に、読者のアイロニー効果に対する期待と乖離してしまうというネガティブな効果の可能性もあること、そして、その結果、エピグラフを介した著者・読者間のコミュニケーション上の阻害要因に繋がってしまう場合もあることをわれわれに示してくれる。言い換えるならば、Bowen（1995）の分析から、著者のアイロニーとしてのエピグラフの意図が有効に機能するのは、“期待された読者”が、著者の本来の意図の文脈の意味を変えることなく、エピグラフから有効なメッセージやシグナルを受け取ることができる場合に限られる、という命題が導き出される。

考察

本研究の目的は、「エピグラフを介した発信者（著者）・受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題を解決するためには、著者にはエピグラフを用いる際の読者の持っている社会的文脈（「同時代性」）を考慮した上で、読

グラフを冒頭に置き、読者に対してアイロニーの意図（新世界は決してすばらしくはない、という真の意味）を本文より先に伝えておいて、そしてアイロニーという意図で築かれた著者（ハクスリー）と読者との間の関係性を維持したまま、本文の内容における読者の理解にもアイロニーの意図を繋げていこう、という、ハクスリーの極めて巧妙で精緻な戦略性が強く感じられるのである。

しかし、ハクスリーが『すばらしい新世界』のなかでアイロニーとしてのエピグラフを用いたような、アイロニー実践に関わる巧妙かつ精緻な戦略性に対して、その危うさ、不確かさを指摘する識者もいる。Bowen (1995) は、ジョン・ファウルズが著した『フランス軍中尉の女』で用いられている章ごとに付されているエピグラフの分析を通して、著者が修辞学的なアイロニーの機能や効果にこだわり巧妙な戦略性をもってエピグラフを用いた場合には、それが著者・読者間の意思伝達上の阻害要因となり得るという見解を示している。Bowen (1995) は、著者のファウルズが、英国の詩人トーマス・ハーディによって書かれた内容的に対立する二つのスタンザで構成される *The Riddle* (日本語訳:「謎」)³ と題された詩うちの第一スタンザのみを第1章の冒頭にエピグラフとして付していることに対して、著者のファウルズの意図と読者の受け取り方が異なる可能性を指摘している。さらに、Bowen (1995) は、この意思伝達の“ミスマッチ”は、読者の著者に対する不信や疑念を招き、その結果として、著者の読者に対するコントロールの低下が生じるのだ、と説明しているのである。このBowen (1995) の説明を要約すると、次のとおりになろう。すなわち、著者のファウルズは、内容的に対立する二つのスタンザを持つハーディの詩のうち、第一スタンザのみをエピグラフとして選択して冒頭に置いたが、Bowen (1995) によれば、これは、ファウルズが、詩の反転性もしくは逆説性に対するファウルズ自身の理解を完成させるために、もう一方の対立項としての第二スタンザの提示ではなく、詩の内容とは文脈が異なる自分の小説のなかの登場人物であるサラと、そこで描写されている風景のなかに、メタファーとして隠喩化しようとした戦略によるものである。その一方で読者の方は、第一スタンザに対する対立項としての第二スタンザの存在はすでに知っており、それゆえ、二つのスタンザを対比的に読み取ることで理解できる反転性もしくは逆説性というアイロニーとしての意味を期待している。しかし、ファウルズが置いたエピグラフには第二スタンザがなく、このため読者はファウルズの意図に不信感を抱く。Bowen (1995) は、読者のファウルズに対する不信感の理由として、「(ファウルズの意図と読者の期待する) 謎の用語は

「ア的社會」と相反する「完璧ではないものの、より自由な非ユートピア的社會」という対比構造をエピグラフのなかからアイロニーとして読み取り、その結果、ユートピア世界とは、決してタイトルに含まれる「すばらしい（原題では、“Brave: 勇敢な”という語が使用されている）」新世界ではなく、それとは対照的な、“すばらしくない”世界なのだ、という逆説的な意味を読み取る、これがアイロニーとしてのエピグラフの効果である。

Booth (1974) が説明するとおり（また筆者が要約したとおり）、ベルジャーエフのエピグラフのなかの逆説性、もしくは対比構造を読者に喚起させることがアイロニーの効果である。ならば、ベルジャーエフのエピグラフのなかの「知識人や教養ある階層が、(省略) 非ユートピア的社會に戻る方法を夢想する」の対立項は一体何であろうか。Booth (1974) は、この点について具体的には言及していないが、逆説性、もしくは対比構造の構築こそがアイロニーの効果だと仮定するのであれば、「知識人や教養ある階層が、(省略) 非ユートピア的社會に戻る方法を夢想する」の対立項に該当する箇所は、おそらく、本文のなかに記載されている「哲学者ではなく、旋盤工や切手蒐集家なのだ」とであると、容易に推察することができる。

このように、アイロニーが特性として持っている“否定による反転”という機能性に従い、エピグラフの内容と本文と内容とを対比させてみると、ハクスリーの『すばらしい新世界』における著者・読者間のエピグラフを介した意思伝達のプロセスが浮かび上がってくる。つまり、①まず読者は、冒頭に置かれているベルジャーエフのエピグラフを読むことで、“非ユートピア的”アイロニーの手がかり（つまり、ユートピア的社會の実現によってつくられる新世界は、決してすばらしくはない、という真の意味）を得え、②そして次に、本文のなかの「社會の屋台骨を支えているのは哲学者ではなく、旋盤工や切手蒐集家なのだ」という所長の語りの箇所まで読み進めた時にはじめて、③冒頭のエピグラフでは見出せなかった「知識人や教養ある階層」の対立項に出会い、そして、④この所長の語りもアイロニーである、つまり、所長の語りの内容の真意はその逆で、「社會の屋台骨を支えているのは旋盤工や切手蒐集家ではなく、哲学者なのだ」と解釈するに至る、というアイロニーとしてのエピグラフを介した意思伝達のプロセスを見出すことができるのである。裏を返して言うと、著者のハクスリーによるベルジャーエフの“非ユートピア的”エピグラフの選択の背景には、このエピ

して実際に用いられた場合、その効果の捉えられ方には、そもそも両義性が存在するため、アイロニーの受け手に対して誤解や混乱を与えたり、または、送り手と受け手の間の意思伝達の対象（意味）がぼやけてしまったり、あるいは、意思伝達そのものが成立しなくなる可能性すらある、このため、アイロニーに対しては、肯定的もしくは否定的な評価と解釈がそれぞれ成り立ってしまう、これがアイロニーの効果に対する評価の両義性である、というのが、Hutcheon (1992) の考えであろう。

文学作品におけるアイロニーとしてのエピグラフの機能と効果の幾つかの文献レビュー

文学作品におけるアイロニーとしてのエピグラフは、アイロニーとしての何らかのメッセージもしくは反転された意味を読者に伝達する、という意思伝達としての機能を持つ。Booth (1974) は、著書である *A rhetoric of irony* のなかで、「小説や詩の冒頭に付されたアイロニーとしてのエピグラフが（物語の進行の過程で）**アイロニー的な反転**（強調は那珂による。）が起こりうることを（読者に）示す最も明確な手がかりとなることがしばしばある」（Booth, 1974, p.54）、と述べている。このアイロニーとしてのエピグラフの機能性を踏まえ、Booth (1974) は、オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界（原題：*Brave New World*）』の冒頭に付されている、ニコライ・ベルジャーエフのエピグラフ¹とそれに続く本文の最初の箇所を示した上で、本文中に記載されている「総合的理解は知的な必要悪である。社会の屋台骨を支えているのは哲学者ではなく、旋盤工や切手蒐集家なのだ。」²という、〈孵化・条件づけセンター〉の所長の語りと思われる表現について、「読者はどのようにして、このエピグラフの表現から、表面上の意味ではなく、アイロニーに満ち溢れていることを知ることができるのか」（Booth, 1974, p.84）、という問いを我々に投げかける。この問いに対する Booth の説明を要約すると、次のとおりとなろう。すなわち、読者は、ベルジャーエフのエピグラフをとおして、エピグラフに表現されている表面的な意味ではなく、それとは**相反する（隠れた）アイロニーとしての意味**を読みとることができる。読者は、エピグラフによって表現されている「ユートピア的社会を実現するためには、実は非ユートピア的社会を実現することである」という逆説的な意味をアイロニーとして受け取り、また、「統制システムで形成される管理社会としてのユートピ

アイロニーの実践上の効果の評価の良し悪しについては、これまでの文学理論の研究領域においては、かなり早い段階から複数の識者によって指摘されてきた。例えば Kaufer (1977) は、「すべてのレトリックでは、聴衆 (an audience) は話し手 (the speaker) の発言を処理する際に、高度に構造化された推論パターンを通過する必要がある」(Kaufer, 1977) とした上で、アイロニーの機能の特性を次のように説明している。

アイロニーが、さまざまなレベルの意味を呼び起こす他の修辭的表現 (rhetorical figure) と異なるのは、アイロニーにおけるこれらの異なる意味のレベルが、**否定の操作によって**関連していることである。否定には、論理的な否定もあれば、語り手が不条理や事実に反することを述べる場合もある。しかし、否定の形式が何であれ、アイロニーの実践者 (ironist) が生み出す意味のレベルを**互換性のないものに**することが (アイロニーの) 機能である (Kaufer, 1977) (英語の原文を那珂が翻訳した。また、丸括弧と括弧内の記載、および強調は那珂による。)

つまり、語り手によって発せられたすべての修辭的表現に対して、聞き手は、高度に構造化された推論パターンを通過する必要があるが、アイロニーという修辭的表現は、否定の手続きによって、表面的な、“額面どおり”の意味と、話し手の意図している意味との間の互換性を無くすことがそもそものアイロニーの効果であるため、聞き手が両者のギャップを埋めるのはなかなか難しい、というのが、Kaufer (1977) のアイロニーの修辭的機能に対する基本的な捉え方であると考えられる。

Hutcheon (1992) は、修辭的表現としてのアイロニーの特性による意思伝達のミスマッチの問題について、より詳しく考察している。Hutcheon (1992) によれば、アイロニーには「*Critical edge* の感覚 (アイロニーの機能の定義がわかりにくく、複雑だという感覚) が比較的少ないにもかかわらず、(実践上の効果については) 異なる評価の可能性」(Hutcheon, 1992) がある。Hutcheon (1992) はその理由として、「不必要な複雑さや不確かさという点での曖昧性が、誤解や混乱、あるいは単にコミュニケーションにおける明瞭さの欠如につながる」(Hutcheon, 1992) ことによって引き起こされる「(アイロニーに対する) 正反対の評価に内在する両義性」を挙げている。つまり、アイロニーが修辭的な目的と

文学理論研究の領域におけるアイロニーの機能と効果に関する幾つかの文献レビュー

修辞的表現としてのアイロニーは、アイロニーそれ自体に備わっている本来的な特性、すなわち、“発話者によって送信されたアイロニーの意図を、受け手が必ずしもそのとおりに受け取らない可能性がある”、という特性を持っている。*A Dictionary of Media and Communication* で説明されているアイロニーの定義は、そのことを端的に示している。

(アイロニーとは) 一般的に、文字通りに解釈すると、表面的には正反対のことを表現しているように見える言葉を使って、自分の意図する意味を表現することである。意図された意味はメッセージ自体にはない。**聴衆は、そのモダリティの状態(文字通りの意味、アイロニーとしての意味、嘘の意味)を解釈するために、文脈の手がかり(例えば、非言語的なシグナル)を参照しなければならない。**聴衆の一部だけが意図された意味を特定できる場合、それはナローキャスティングの一形態とみなすことができる。(アイロニーは) 修辞学では言葉の綾であり、記号論では一種の二重記号である。過小表現と過大表現もアイロニーになる。アイロニーは、ポストモダニズムの特徴的な文体である(英語の原文を那珂が翻訳した。また、丸括弧と括弧内の記載、および強調は那珂による。)

したがって、上記の辞書上でのアイロニーの定義に従えば、アイロニーのコミュニケーション上のミスマッチの問題とは、アイロニーとしてのエピグラフの効果に対する評価の良し悪しに直接的に関わる問題である、と言える。Booth (1983) は、アイロニーの原理について、キルケゴールが「無限なる絶対的否定」と述べていることを引き合いに出し、アイロニーの機能とは「“否定”という手続きを踏むことで有限性という現実を暴くこと」(Booth, 1983) である、と説明している。一方で、Booth (1983) は、一部のアイロニー実践者にとっては、そのアイロニーの機能としての“絶対的否定”の原理が人生の究極の真理になってしまう可能性もある、とした上で、そのような人がアイロニーを実践すると、その結果、虚無主義や絶望に繋がってしまう、という警告も同時に指摘している(Booth, 1983)。

エピグラフのサンプリング調査を実施した結果、エピグラフの引用元として最も多いテキストは聖書であることがわかった（Griffin, 2023, p.109）。その上で、Griffin（2023）は、聖書のテキストが当初は、歴史的権威（historical authority）を示す目的（これは、ジュネットのエピグラフ命題の（4）に該当すると考えられる。）でエピグラフとして用いられていたが、この目的でのエピグラフの使用は19世紀までの期間のなかで劇的に減り、20世紀に入ると、主にアイロニーを示す目的でエピグラフとして用いられるようになった（Griffin, 2023, p.50）、と幾つかの事例を示しながら指摘している。

このGriffin（2023）の指摘は、少なくとも現代の著作物（19世紀や20世紀初頭、もしくはそれ以前の古典作品ではなく、現代におけるジャンル小説など）のなかで用いられているエピグラフの機能や効果を調べるために、アイロニーという修辞法に着目することが、決して的外れでないことを明らかに示している。このため、本研究では、アイロニーとしてのエピグラフの機能および効果を調べることで、エピグラフのコミュニケーション上のミスマッチの問題を議論することが十分できると判断した。

本稿の構成

本稿では、まず、アイロニー修辞的表現の機能と効果について、文学理論の研究領域におけるこれまでの議論のレビューを行い基本的な理解を共有する。次に、エピグラフの実践に際して著者の精緻な戦略上の姿勢が求められると思われるアイロニーとしてのエピグラフの機能と効果について、文学理論のなかのエピグラフ研究における幾つかの議論のレビューを行う。その後、これら二つのレビューの結果を整理し、「発信者（著者）と受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題」がエピグラフ研究の領域のなかでどの程度議論されているかを確認すると同時に、「エピグラフを用いる際の著者側の精緻な戦略上の姿勢が著者には求められる」という仮説が妥当かどうかを考察し、その結果を提示する。最後に、今後の展望や課題を挙げる。

問題の解決方法としての仮説

本研究では、那珂（2020; 2021）による研究の結果に基づき、以下の仮説を立てた。

仮説: エピグラフを介した発信者（著者）・受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題を解決するため、著者には、エピグラフを用いる際、読者の持っている社会的文脈（「同時代性」）を考慮した上で、読者との関係性を構築していこうとする、精緻な戦略上の姿勢が求められる。

本研究の目的

本研究は、エピグラフ研究におけるこれまでの議論のレビューやエピグラフが用いられている幾つかの文学作品のレビューをとおして、1）先行する研究（那珂 2020; 2021）で見出された「発信者（著者）と受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題」がエピグラフ研究の領域のなかでどの程度議論されているか、を確認すると同時に、2）ミスマッチの問題を解決するための仮説（上記を参照のこと。）が妥当な解決策かどうかを検証することを目的とする。

分析対象

エピグラフ研究における上記の問題を解決するため、本研究では、エピグラフを介した発信者（著者）と受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題が顕著に現れると思われる修辞法としての“アイロニー”の機能と効果に着目する。その上で、文学作品で用いられている修辞的アイロニーとしてのエピグラフを対象に分析する。

アイロニーとは、*Oxford Dictionaries Online* によると、「通常、ユーモラスな効果や強調効果を狙って、反対の意味を持つ言葉を使って自分の言いたいことを表現すること」を意図した修辞的表現の一つである。文学作品などでは、このアイロニーの効果を期待して、アイロニーとしてのエピグラフが用いられることは少なくない。Griffin（2023）によれば、過去から現代に至るまでの 3,500 点以上の

エピグラフ（引用文）のコミュニケーション・ツール としての機能性に関する研究(3)

—アイロニーとしてのエピグラフの効果と意思伝達上の問題点の考察—

那 珂 元

問題の所在

文学作品におけるエピグラフとは、*The Oxford Dictionary of Literary Terms*によれば、「書物、章、詩の冒頭に、そのテーマを示すために置かれる引用や標語」を指す。フランスの文学理論家ジェラルール・ジュネット（Gérard Genette）は、19世紀から20世紀初頭にかけて出版されたフランス文学もしくはイギリス文学のなかで使われているエピグラフの機能を分析し、（1）タイトルを解明し、説明する機能、（2）テキストを注釈する機能、（3）エピグラフの作者に対する著者の尊敬の念や深い敬意を表明する機能、および（4）自身の作品が文化・歴史のかつ知的な作品に帰属しているというシグナルを読者に伝える機能、の4つの命題を提示した（Genette, 2001, pp.183-187）。しかし、ジュネットのエピグラフ機能の命題からは、発信者（著者）・受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチに対する考察が見落とされている（那珂 2020）。

那珂（2021）は、発信者（著者）・受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題をより深く考察するため、現代のジャンル小説におけるエピグラフ実践の効果を理論、実証の両面から分析した。分析の結果、ジュネットがエピグラフの機能性の分析のなかで見落としてしまっているエピグラフの考察とは、著者がエピグラフを用いる際に、読者の持っている社会的文脈（「同時代性」）を考慮して読者との関係性を構築していく精緻な戦略上の姿勢があるかどうか、に対する考察であることがわかった（那珂 2021）。しかし、現在のエピグラフ研究におけるエピグラフ機能の議論において、那珂（2020; 2021）が指摘したような、エピグラフを介した発信者（著者）・受信者（読者）間のコミュニケーション上のミスマッチの問題に対する考察は見当たらない。

(付表3) 最終レポート ルーブリック

観点	説明	期待以上	よい	少し努力を要する	努力を要する
字数	指定された字数で書かれているか。	指定字数の9割以上	指定字数の8割程度	指定字数の7割程度	指定字数の6割以下
意見の提示	自分の意見を根拠とともに明確に提示しているか。	自分の意見を根拠とともに過不足のない形で十分、かつ明確に提示している。	自分の意見を根拠とともに明確に提示している。	自分の意見と根拠の関連が認められるが、一部明確でない形で提示している。	自分の意見を根拠がない形で提示している。
構成と論理展開	構想メモに従って本文が構成されているか。また、序論から結論までが論理的に一貫しているか。	構想メモに従って、序論・本論・結論に記載すべき内容が記述されており、レポート全体の論理的な流れが一貫して明確である。	おおむね構想メモに従って序論・本論・結論に記載すべき内容が記述されており、論理的な一貫性がうかがえる。	一部、構想メモに従っていない部分がある。序論・本論・結論の構成が、論理的に一貫していない部分がある。	構想メモに従って本文が書かれていない。序論・本論・結論の構成に配慮せず、情報を寄せ集めているに過ぎない。
文章表現	文体・文法・語彙・句読点・字下げなどに誤りや乱れがなく、主語と述語が呼応した文が作られているか。	文体・文法・語彙・句読点・字下げなどに誤りや乱れがなく、読み手を意識した明快でわかりやすい文で書かれている。	文体・文法・語彙・句読点・字下げなどに誤りや乱れがなく、一文の主語と述語が呼応している。	文体・文法・語彙・句読点・字下げなどに誤りや乱れが見られる。また、文が長すぎたり、主語と述語が呼応していなかったりする箇所がみられる。	文体・文法・語彙・句読点・字下げなどに誤りや乱れが多く見られる。また、文が長すぎたり、主語と述語が呼応していなかったりする箇所が複数みられる。
書式設定	指定された書式設定に従って作成されているか。	指定された書式設定に従って、見やすくわかりやすく作成されている。	指定された書式設定に一か所ミスがあるものの、許容範囲である。	指定された書式設定に二か所程度ミスがある。	指定した書式設定を全く守っていない。
引用の仕方	正しい方法で引用しているか。	引用の種類に応じた正しい方法で引用されている。	おおむね指定された方法で引用されている。	引用の仕方に誤りが見られる。	引用と自分の文との区別ができていない。
引用・参考文献の提示	引用・参考文献を2つ以上、適切に提示しているか。	引用・参考文献を3つ以上、適切な方法で提示している。	引用・参考文献を2つ、適切な方法で提示している。	引用・参考文献の提示方法に一部誤りが見られる。または、引用・参考文献の数が指定よりも少ない。	引用・参考文献が提示されていないか、提示の方法がでたらめである。

(付表2) 最終レポート チェックリスト

書式設定	内容に合ったタイトルをつけているか	
	指定された書式設定を守っているか ・特に 40 字×30 行の設定	
	指定された字数 (1200～2000 字) を守っているか	
文章表現	段落のはじめは 1 字下げているか	
	話し言葉ではなく書き言葉で書いているか	
	文末は常体 (だ・である) で統一されているか	
	文末が体言止めになっていないか	
	主語と述語が対応しているか、ねじれ文がないか	
	読点や記号は適切に使われているか	
	形式名詞や補助動詞はひらがなで書いているか	
	誤字・脱字はないか	
段落構成	序論・本論・結論の構成になっているか	
	序論で問いをたて、結論を予告しているか	
	本論で客観的な事実や先行研究が根拠として示されているか	
	結論で自分の主張をまとめ、今後の課題や展望を示しているか	
引用	自分の意見と他人の意見を区別しているか	
	資料を 2 点以上引用しているか	
	正しい方法で引用しているか ・短い直接引用 ・長い直接引用 ・間接引用	
	孫引きはしていないか *「孫引き」とはAの文献内で引用されたBの文献を引用すること。必ずおおもとのBの文献にあたること。	
引用・参考文献	信頼性のある文献を使っているか	
	本文の後に「引用・参考文献」リストをつけたか	
	「引用・参考文献」の書き方は適切か	

(付表1) 構想メモワークシート

タイトル		
序論	問題提起（問い）と結論（主張）の予告	問題提起（問い）： 結論（主張）：
本論	結論（主張）を裏づける根拠 *事実と先行研究をもとに考えること。	
結論	結論（主張）と今後の課題や展望など *今後の社会の望ましい在り方に触れること。	

79 短大におけるアカデミック・ライティング指導とその効果

(2023.8.23 最終閲覧)

- 5) 春日美穂他 (2021) 『あらためて、ライティングの高大接続―多様化する新入生、応じる大学教師』 ひつじ書房
- 6) 日本漢字能力検定協会 (2021) 『基礎から学べる！ 文章力ステップ 文章検3級対応』 日本漢字能力検定協会
- 7) 松浦年男 (2018) 「07 北星学園大学の事例 レポート作成技能に焦点を当てた全学共通表現科目の取り組み」 『大学初年次における日本語教育の実践 大学における学習支援への挑戦3』 ナカニシヤ出版
- 8) 松下佳代 (2012) 「<センター教員・共同研究者論考> パフォーマンス評価による学習の質の評価：学習評価の構図の分析にもとづいて」 『京都大学高等教育研究』 18, pp.75-114
- 9) 田宮憲 (2014) 「ループリックの意義とその導入・効用」 『高等教育開発センターフォーラム』 1, pp.125-135
- 10) 薄井道正 (2015) 「〈実践報告〉初年次アカデミック・ライティング科目における指導方法とその効果：パラグラフ・ライティングと論証を柱に」 『京都大学高等教育研究』 21, pp.15-25

(かつやま・ひろこ 本学教員)

(みやもと・じゅんこ 本学教員)

代文書A」の実践研究の成果をまとめたものである。本実践研究においては、教材の提供を賜った日文科の先生方に心より感謝申し上げる。

注

- 1 この質問項目については、渡辺哲司（2021）「『言語活動の充実』によって高校までの『書く』学習の機会は増えたか』『あらためて、ライティングの高大接続―多様化する新入生、応じる大学教師』（ひつじ書房）を参考に作成している。
- 2 文章読解・作成能力検定3級のレベルは「高校での積極的な理解・表現活動、知的言語活動のために、あるいは、実社会におけるコミュニケーション活動を行うために必要な文章読解力及び文章作成力」であり、語彙力に関しては漢字検定3級程度となっている。
- 3 第8回の参考文献の探し方については、図書館ガイダンスを活用し、OPAC、CiNii、データベースの調べ方についての演習を行った。
- 4 今年度は諸事情により、13・14回の内容をまとめて実施している。
- 5 ルーブリック評価表はそれぞれのレポートで要求される項目をふまえて作成されている。最終レポートのルーブリックを付表3で示した。

引用・参考文献

- 1) 中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）【概要】」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/17/1411360_7_1.pdf（2023.8.23 最終閲覧）
- 2) 文部科学省（2009）「高等学校学習指導要領改訂のポイント」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_001.pdf（2023.8.24 最終閲覧）
- 3) 文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領解説 総合的な探求の時間編」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/11/22/1407196_21_1_1_2.pdf（2023.8.24 最終閲覧）
- 4) 文部科学省（2010）「高等学校学習指導要領解説 国語編」https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/28/1282000_02.pdf

6. まとめと今後の展望

日文科の授業では、レポート作成が求められることが多い。「言語活動の充実」が求められるようになった2009年度の学習指導要領改訂以降、高校教育段階で「書くこと」を学ぶ機会は増えているが、アンケートの自由記述を見る限り、高校での学習が短大でのレポート作成に役立ったという認識は多くはない。このような学生の実態をふまえると、今年度の本科目の授業実践は意味のあるものだったと言える。今後、さらに指導方法を改善していくために、以下の4点を提案したい。

まず、学生の日本語力を把握するためのプレースメントテストの実施と、入学前教育に日本語基礎力向上の内容を入れることである。日文科の学生の日本語力にはかなりの格差がある。その実態を把握し、入学前に日本語力の底上げしておくことは、入学後の円滑な学修につながるはずだ。二つ目は学生の能動的な学習を促すためにルーブリックを改良することである。ルーブリック評価の効用の中でも特に重要なことは、フィードバックが迅速に実施でき、学習目標と到達レベルを学生が把握しやすいことにある。この利点をさらに活かし、学生の能動的な学習につなげていくことが必要となる。三つめはレポートの論理構成の要となる論証の方法を丁寧に指導することである。本科目のシラバスではレポートの形式や文章表現については十分な時間を割いているものの、論証の方法については十分な時間をとるような設計になっていない。ルーブリックの観点「意見の提示」で点数が伸びなかったのは、論証についての指導の不十分さが一因となっているのではないだろうか。日文科生は学科の特性もあって感性豊かな学生が多いが、その一方で、論理的な思考を苦手とする者も多いので、論理的な思考に慣れさせる指導が必要である。四つ目は「メール・チャットの使い方」の位置づけの見直しである。メールやチャットは短大での学修シーンで教員や学生同士の連絡手段としてなくてはならないツールであるので、入学直後に実施することが望ましい。本科目の内容をレポートの書き方に特化するならば、「メール・チャット」については、基礎力活用講座に回すなどの変更も考えられるのではないか。

本稿では、「現代文書A」のルーブリック評価を活用した授業実践を振り返り、日文科におけるライティング指導の在り方を検証した。不十分な報告ではあるが、今後、本科目を担当する先生方の参考になれば幸いである。

謝辞

本稿は、筆者が所属する常葉大学短期大学部日本語日本文学科の必修科目「現

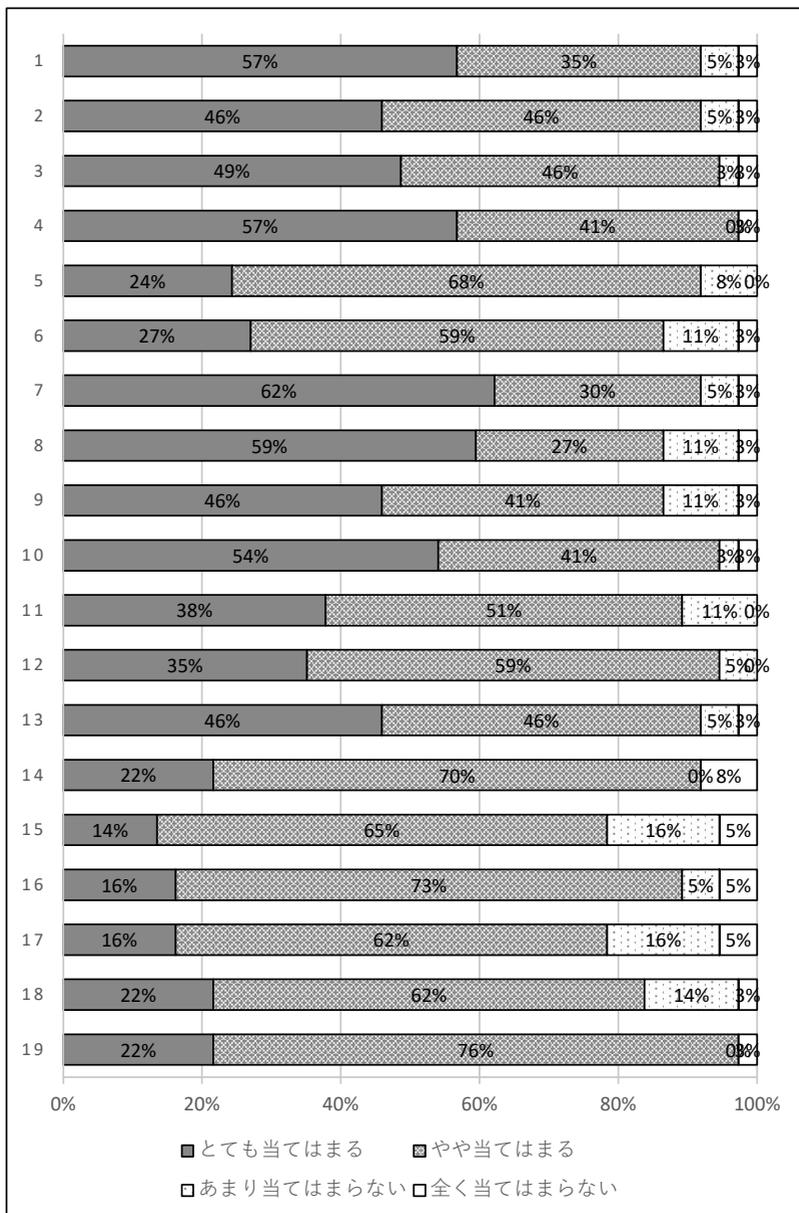


図8 最終アンケート回答結果

15. レポートで、課題に応じた適切な問いが立てられるようになった。
16. レポートで、自分の意見を根拠とともに明確に提示できるようになった。
17. 引用の種類に応じた正しい方法を用いることができるようになった。
18. 信頼性のある参考文献を、正しい方法で提示することができるようになった。
19. レポートにふさわしい文章表現ができるようになった。

アンケートの自由記述から、本科目に対する学生の受け止め方について整理する。まず、「高校三年間を通じて、できるだけと感じていたことが思ったようにできず、反省することが多かった」「今までレポートを書いたことがほとんどなく、大学でのレポート作成が不安だった」「今までは文章を考えるとときは何も意識せずに書いていた」「高校の時に書いていた文章の書き方と全く違っていた」という記述からは、この授業が高校までの「書くこと」を振り返る契機となったことがうかがえる。資料の検索や引用の方法、参考文献の提示方法等のレポート作成の技能をこれからの学修に活かしていこうというコメントが複数あったことは、本科目の目的が学生に理解されていることの証しだと考えられる。文章表現や句読点、符号の使い方、話し言葉と書き言葉の違いなど高校段階でも学んだ日本語の基礎知識については、改めて確認できたことを評価するコメントがある一方、「大学生になってまで授業でやるような内容ではない」「大学生だからこそ必要になる知識を教えてほしい」といった辛口の評価もあった。この指摘は、学生の日本語力の習熟度の差を示しており、習熟度をふまえた授業設計の必要性を考えさせるものと言える。

5. 最終アンケートからみる学生の受け止め方

本科目の効果を検証するため、終講回において受講生にアンケート調査を行った。質問紙では、授業を通じてできるようになったことについて4件法で尋ねた。回答者は受講者39人中37人だった。表7はアンケートの質問項目、図8は回答結果の分布である。全項目において、「とても当てはまる」「やや当てはまる」項目が70%を越えており、学生たちがこの授業の学習効果を肯定的に受け止めていることがわかる。「とても当てはまる」回答が5割を超えた項目は、「1. Wordの使い分け」「4. 段落の機能」「7. OPAC検索」「8. CiNii検索」「10. 表・グラフの読み取り」であった。一方、「とても当てはまる」解答が30%未満の項目は「5. 句読点の使い方」「6. 符号の使い方」「14. タイトル付け」「15. 適切な問い」「16. 意見の提示」「17. 引用の仕方」「18. 参考文献の提示」「19. 適切な文章表現」であった。5. 6. 19の項目はループリックの観点「文章表現」に該当しており、教員の評価同様、学生にも苦手意識があることがわかる。また、14. 15. 16. 17. 18はレポートの内容、特に論証に関わる項目である。ライティング・スキルとしての論証の方法について、指導方法の改善が必要だと考えられる。

表7 最終アンケート質問項目

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. Word のデスクトップ版と Web 版の違いがわかるようになった。 2. 主観的文章と客観的文章の違いがわかるようになった。 3. 話し言葉と書き言葉を使い分けられるようになった。 4. 段落の機能を理解し、適切に使えるようになった。 5. 句読点の使い方を理解し、適切に使えるようになった。 6. 日本語の文章に用いられる符号を、適切に使えるようになった。 7. 図書館の OPAC で資料の検索ができるようになった。 8. CiNii で論文の検索ができるようになった。 9. 図書館のデータベース（新聞等）を使えるようになった。 10. 表・グラフの読み方がわかるようになった。 11. 事実と考察の切り分けが理解できるようになった。 12. チャット・メール・手紙の特徴を理解し、書き分けられるようになった。 13. レポートを序論・本論・結論の三部構成で書けるようになった。 14. レポートで、内容に合った適切なタイトルをつけられるようになった。 |
|--|

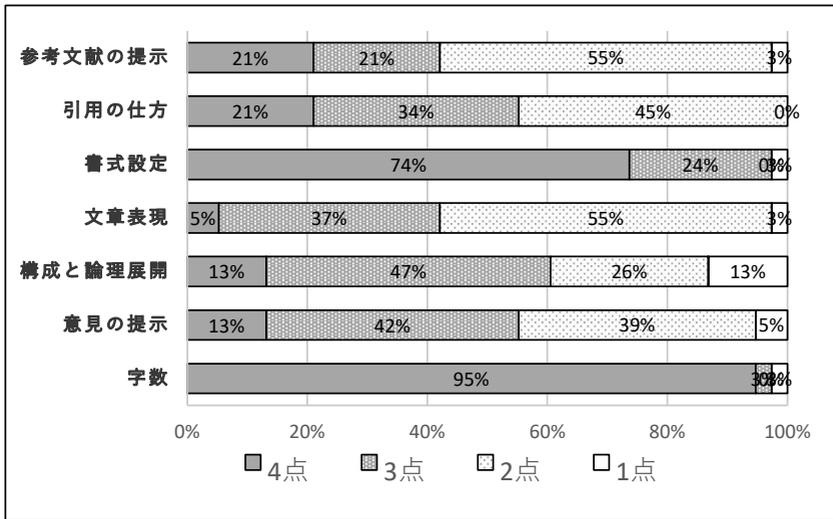


図6 実践演習2のルーブリック評価

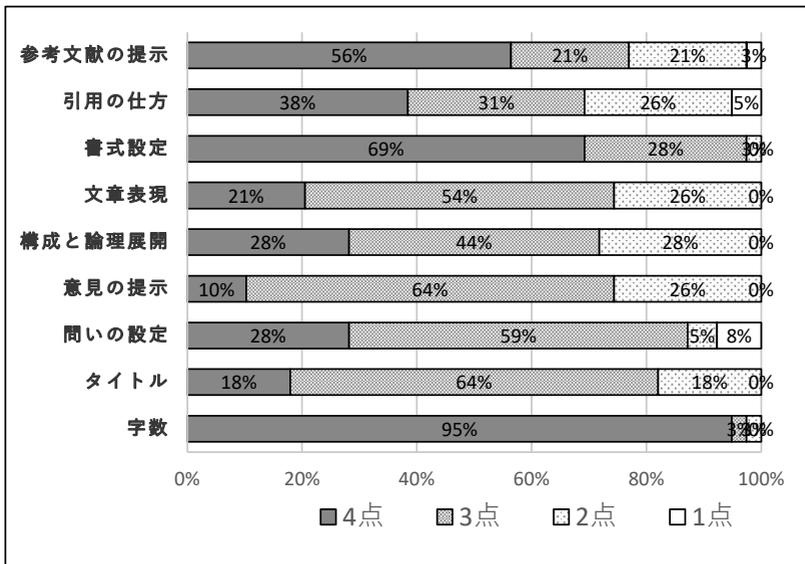


図7 最終レポートのルーブリック評価

表6 評価観点ごとの平均点

評価 観点	字数	タイトル	問いの 設定	意見の 提示	構成と 論理展開	文章表現	書式設定	引用の 仕方	参考文献の 提示
実践演習1	3.95			2.79	2.58	2.50	3.71		
実践演習2	3.89			2.63	2.61	2.45	3.68	2.76	2.61
最終 レポート	3.92	3.00	3.08	2.85	3.00	2.95	3.67	3.03	3.31

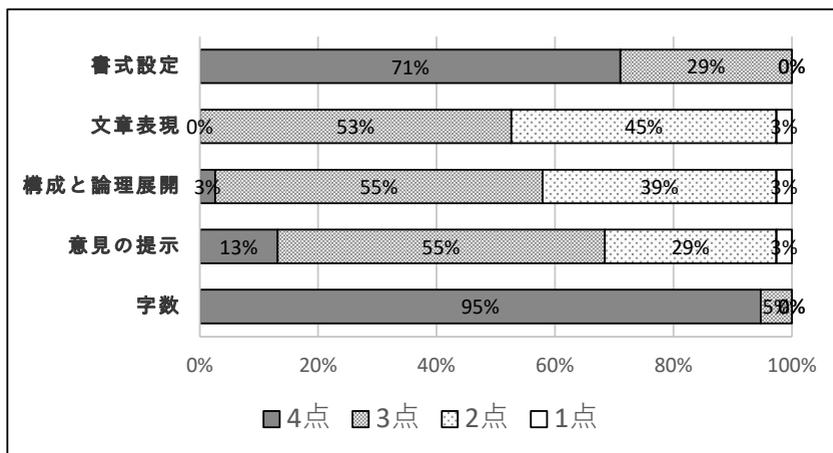


図5 実践演習1のルーブリック評価

それぞれのレポート課題の評価で用いたルーブリックの評価観点は表5のとおりである。ルーブリックはそれぞれの項目について4段階(4点～1点で数値化)の評価尺度で評価するよう設定している。学生には出題の時点で、ルーブリックを提示し⁵、評価基準を確認したうえで作成するよう促した。レポートはそれまでの学習内容をふまえて書くことになっているため、ルーブリックの評価観点もそれに合わせて変更している。

表5 レポート課題ルーブリックの評価観点

評価 観点	字数	タイトル	問いの 設定	意見の 提示	構成と 論理展開	文章 表現	書式 設定	引用の 仕方	参考 文献の 提示
実践演習1	○			○	○	○	○		
実践演習2	○			○	○	○	○	○	○
最終 レポート	○	○	○	○	○	○	○	○	○

各レポートの評価観点ごとの平均点は表6のとおりである。また、図5・6・7は各レポートの評価観点ごとの得点分布を算出したものである(得点分布の割合は小数点第1位以下を四捨五入しているため、合計が100%にならない観点がある)。

「字数」と「書式設定」については実践演習1の段階から平均点が3点を超えており、ほとんどの学生が問題なくできている。「構成と論理展開」については回数を追うごとに平均点が伸びており、最終レポートにおいては平均点が3.00に達している。「引用の仕方」と「参考文献の提示」については、実践演習2の段階では不備が目立ち、平均点は2点台だったが、最終レポートでは3点台に伸びている。フィードバックの段階で、個別にコメントで不備を指摘したことが、学生の気づきにつながったと思われる。一方、評価が伸びなかった観点は「意見の提示」と「文章表現」である。どちらも最終レポート時点においても3点に達しなかった。文章表現のミスについては、入力段階の打ちミスなど推敲不足と思われるものが散見した。提出前のチェックリストの項目が、大まか過ぎたことが影響しているとも考えられる。

本科目で扱うレポートは「論証型レポート」である。学生には論証型レポートとは「与えられたテーマについて、根拠に基づいて自分の考えを主張するもの」であり、「序論・本論・結論の三段落構成を取る」と説明している。さらに、それぞれの段落に書く内容を、具体的なレポート例を示すことで理解させている。学生が論理的な文章を書き慣れていないことを考慮し、実践演習1・2では出題者が問題（問い）を与える是非型で書かせた。最終レポートでは自ら問いを立てて、根拠をもとに結論を論じるという意見提示型を取った。

実践演習2、最終レポート作成時には序論・本論・結論の三段落構成の論理展開で構成を考えるための「構想メモワークシート」（付表1）を示した。また、最終レポート提出時には提出前の確認として「チェックリスト」（付表2）を用意した。

4. ルーブリックによるレポート評価

松下（2012）によると、「ルーブリックとは、パフォーマンス（作品や実演）の質を評価するために用いられる評価基準のことであり、一つ以上の基準（次元）とそれについての数値的な尺度、および、尺度の中身を説明する記述語からなる」とのことである。また、田宮（2014）は、ルーブリックの主要な効用を次のように整理している。

- (1) 評価観点・評価規準・評価基準を明確に提示することにより、授業および成績評価に対するアカウンタビリティを確保できる。
- (2) 教員の意図をはっきりと示すことができる（学習目標の明示化）。
- (3) 採点のぶれが少なくなる（公正な評価、評価の一貫性）。
- (4) 採点時間の短縮を図れる。
- (5) 学生への素早いフィードバックに適している。
- (6) 学習目標と到達レベルを学生が把握しやすいため、能動的学習の促進に適している。
- (7) 増加傾向にある学生参加型授業での評価に適している。
- (8) 教員間の情報共有に適した形態である。
- (9) 自らの成績評価の盲点を知ることができる（同僚教員・学生からの指摘や示唆によって、より彫琢された形に修正できる）。

表3 レポート作成に必要な作業及び技能

(1) 調べる作業	8. 参考文献の探し方と提示方法 9. グラフ、表の読み取り
(2) 考える作業	5. レポートの本文構成 1 1. 事実と考察の切り分け
(3) 書く作業	7. 実践演習 1 1 0. 引用の仕方 1 2. 実践演習 2 1 5. 最終レポート
(4) 日本語文章力	3. 文章の種類 語彙・表現力テスト① 4. 書き言葉と話し言葉 語彙・表現力テスト② 6. 句読点等記号類の使い方 1 3. 敬語、連絡のマナー 1 4. 手紙、メールの書き方
(5) パソコン技能	2. ワードの使い方

「現代文書A」では第7回、第12回に実践演習として既習事項をふまえた小レポートを作成させ、授業のまとめとして最終レポートを作成させた。3回のレポート課題の内容は表4のとおりである。

表4 「現代文書A」におけるレポート課題

	課題内容	種類	字数
実践演習 1	階段とエレベーターはどちらが有用か	是非型	800字
実践演習 2	選択的夫婦別姓制度導入の是非	是非型	1000字
最終レポート	「現代日本における貧困」について、自分独自の問いを立てて論じる	意見提示型	1200字 ～ 2000字

表2 「現代文書A」授業の概要（シラバスより作成）

目的	多様な文章表現の仕方を学び、論理的文章表現力を身につける。
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. テーマや分野に応じた文章が書けるようになる。(筋道立てて構成する力) 2. 論理的な表現方法を身につける。(論理的に考察する力) 3. 読み手を意識した理解しやすい文章を書ける。(自分の考えを実証する力)
計画と内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス (レポートと作文 (感想文含む) の違い) 2. ワードの使い方 (ウェブ版・デスクトップ版の違いと禁則処理等) 3. 文章の種類 (文章の種類とその目的) 語彙・表現力テスト① 4. 書き言葉と話し言葉 (書き言葉と話し言葉の使用シーン) 語彙・表現力テスト② 5. レポートの本文構成 (レポートの基本構成) 6. 句読点等記号類の使い方 (句読点等記号類の基本的な使い方) 7. 実践演習1 (これまで学習した内容を元に、小レポートを書く) 8. 参考文献の探し方と提示方法 (参考文献を探すツールとその提示の仕方)³ 9. グラフ、表の読み取り (グラフ・表を数値化して文章化する方法) 10. 引用の仕方 (他人の文章・データの引用方法) 11. 事実と考察の切り分け (事実の指摘と考察を分ける練習) 12. 実践演習2 (これまでに学習した内容を元に、小レポートを書く) 13. 敬語、連絡のマナー (敬語および連絡の際のマナー)⁴ 14. 手紙、メールの書き方 (手紙・メールの書き方) 15. まとめ (最終レポートを書く)

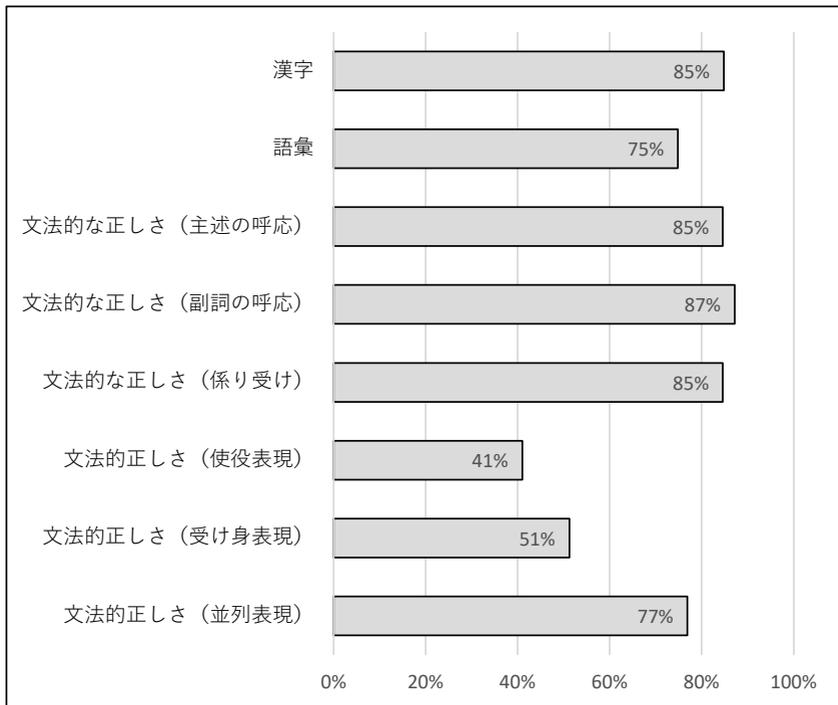


図4 語彙表現力テスト①②の分野別正答率

3. 「現代文書A」授業概要

「現代文書A」は日本語日本文学科の専門必修科目であり、レポート作成の基礎技能習得を中心に授業が設計されている。本年度は1年生37名、2年生2名計39名が履修している。この授業の概要は表2のとおりである。

松浦(2018)によると「レポート作成の基礎技能」とは「レポート作成を(1)調べる作業、(2)考える作業、(3)書く作業という三つのプロセスに分けたときの、それぞれのプロセスにおいて必要な能力」だとする。「現代文書A」では、この三つに加えて、(4)日本語文章力と(5)レポート作成のためのパソコン技能の習得を含んだ内容を設定している。15回の授業の内容をこの分類に分けて整理すると、表3のようになる。

2.3 日文科生の日本語力

第3・4回の授業で、レポート作成の基礎となる日本語力を確認する語彙・表現力テストを行った。テストは日本語漢字能力検定協会の「文章読解・作成能力検定」3級²のテキストから、漢字の読み書き・語彙（漢字熟語・四字熟語・ことわざ・慣用句等）・文法に関する選択問題計20問（20点満点）をMicrosoft Formsで実施した。Microsoft Formsは学生が解答すると即座に採点され、結果がフィードバックされる。授業では、正答率の低かった問題について教員が解説することで知識の定着を図った。

「語彙・表現力テスト①」は平均15.8点（標準偏差3.17）、「語彙・表現力テスト②」は平均15.1点（標準偏差2.29）だった。分野別正答率は図4のとおりである。テスト全体の正答率は75%程度であるが、文法的な正しさを問う問題のうち、使役表現と受け身表現の正答率が低く、これらが文章作成の際の弱点となっていることがうかがえる。今回はテストを2回しか実施できなかったが、回数を増やすことで日本語力の定着を図ることも必要であろう。あるいは、入学後の学修をより充実させるためには、入学前教育に日本語力養成を盛り込むことも考えていくべきだろう。

2.2 高校段階における「書くこと」経験

学生たちは入学前にどのような文章を書いてきたのだろうか。「現代文書A」の受講生39人に高校でどんな「書くこと」を経験しているのかを調査した。結果は表1のとおりである。ほとんどの学生(97.4%)が感じたこと、思ったことを自由に書く感想文を経験しているということは予想通りである。実際、学生たちが書く文章は、特に指示を与えなければ「～思った」「～感じた」という感想文になることが多い。一方、与えられたテーマについて述べる意見文(74.4%)や、資料に対して考えを述べる意見文(71.8%)に比べると、複数の資料を読み比べて考えを構築する意見文(48.7%)の経験者は少なかった。また、大学入試のための小論文経験者が66.7%いることは、本学の総合能力入試で小論文(「課題レポート」)が課せられていることが影響していると考えられる。何らかのテーマに関し、問いを設定し、調査や検証をおこない結論を導く論証型レポートを書く経験がある学生が14人(35.9%)いる。高校での意見文や小論文、論証型レポートの作成経験は日文科が目指す卒業論文作成との連続性がある。入学前にこれらの経験をしている学生が多くないことをふまえて授業設計をする必要がある。

表1 「書くこと」経験アンケート結果(複数回答可)

「書くこと」体験内容	%
体験文	71.8%
感想文	97.4%
説明文	66.7%
紹介文	56.4%
テーマ型意見文①	74.4%
資料型意見文②	71.8%
複数資料型意見文③	48.7%
大学入試小論文	66.7%
企画書(文化祭クラス展示等)	17.9%
報告型レポート(実験・実習報告等)	61.5%
論証型レポート	35.9%
手紙文	51.3%
物語文	46.2%
随筆文	10.3%
詩歌	53.8%

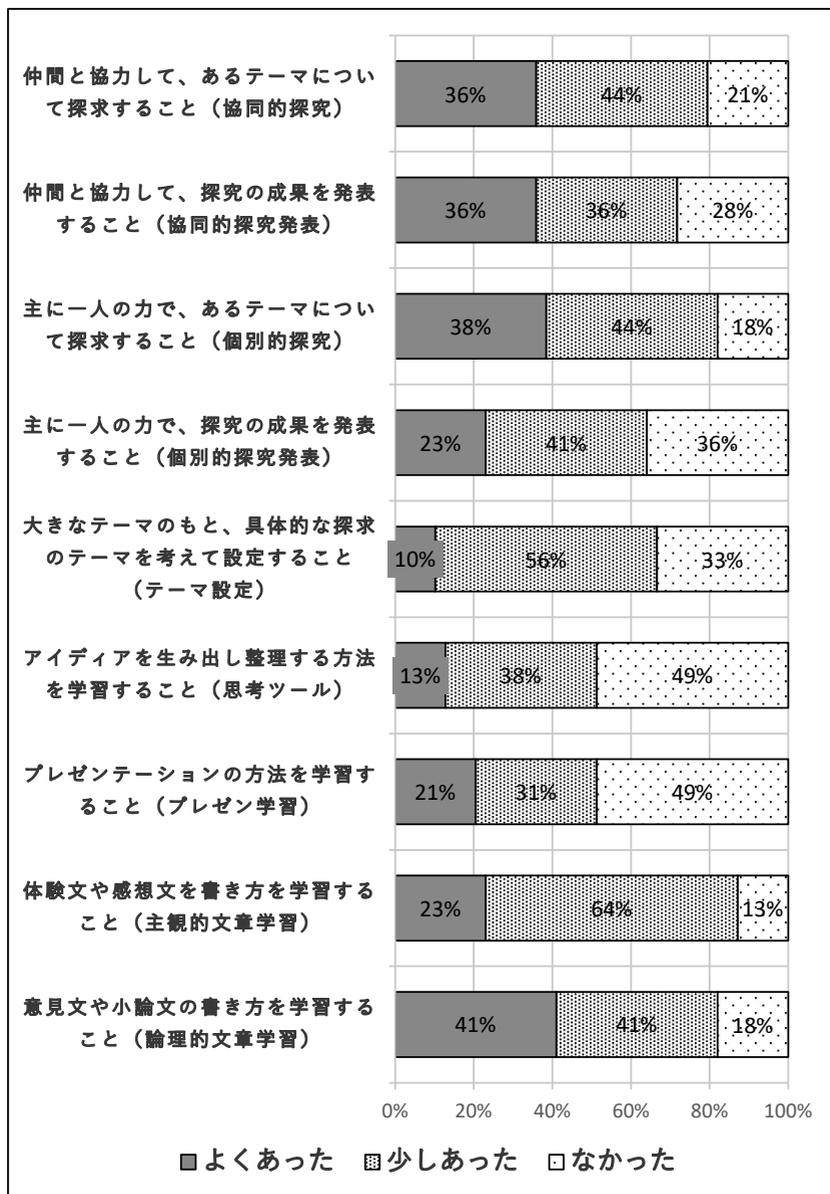


図3 高校における探究活動等の経験

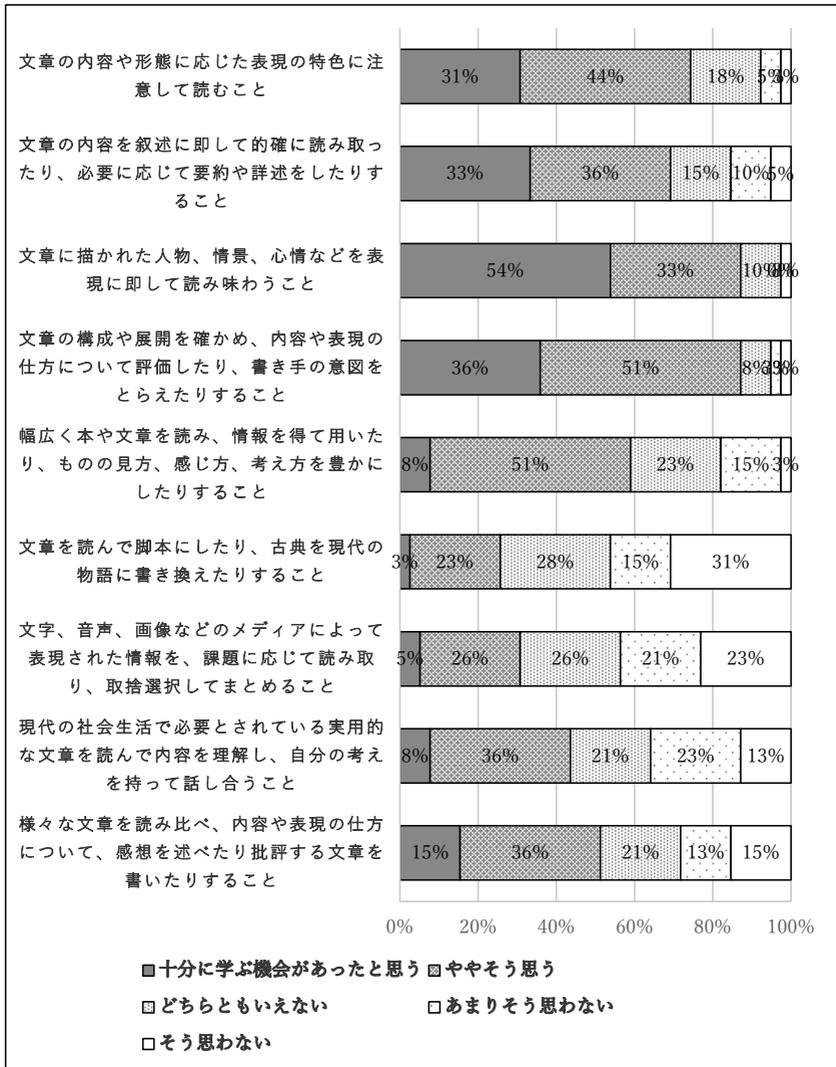


図2 高校における「読むこと」の学習経験

章や図表などを引用し、説明や意見を書くこと」が53%と、半数以上の学生が高校段階でこれらの論理的文章を書く機会があったことがわかる。

レポート作成には調査段階で文章等の資料を読むことが必要になる。図2は2009年告示の高等学校学習指導要領の必修科目「国語総合」における「読むこと」の内容から、指導事項と言語活動例を取り上げ、学ぶ機会について調査した結果である。レポート作成との連続性がある活動については、「文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること」が69%、「文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること」が87%ある。その一方で、「現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと」が44%と、問題意識をもって文章を読み、話し合う機会が少ないことがわかる。

また、レポート作成につながる探究活動の経験やそのために必要な学習方法の経験については図3に示した通りである¹。探究活動については、協働的探求活動の経験ありが80%、協働的探求発表が72%、個別的探究活動が82%、個別的探究発表が64%、テーマ設定が66%と6割以上の学生が経験していることがわかる。また、論理的文章学習が82%あることから、高校段階においてレポート作成の基礎となる文章学習は、かなりの学生が経験済みだとわかる。

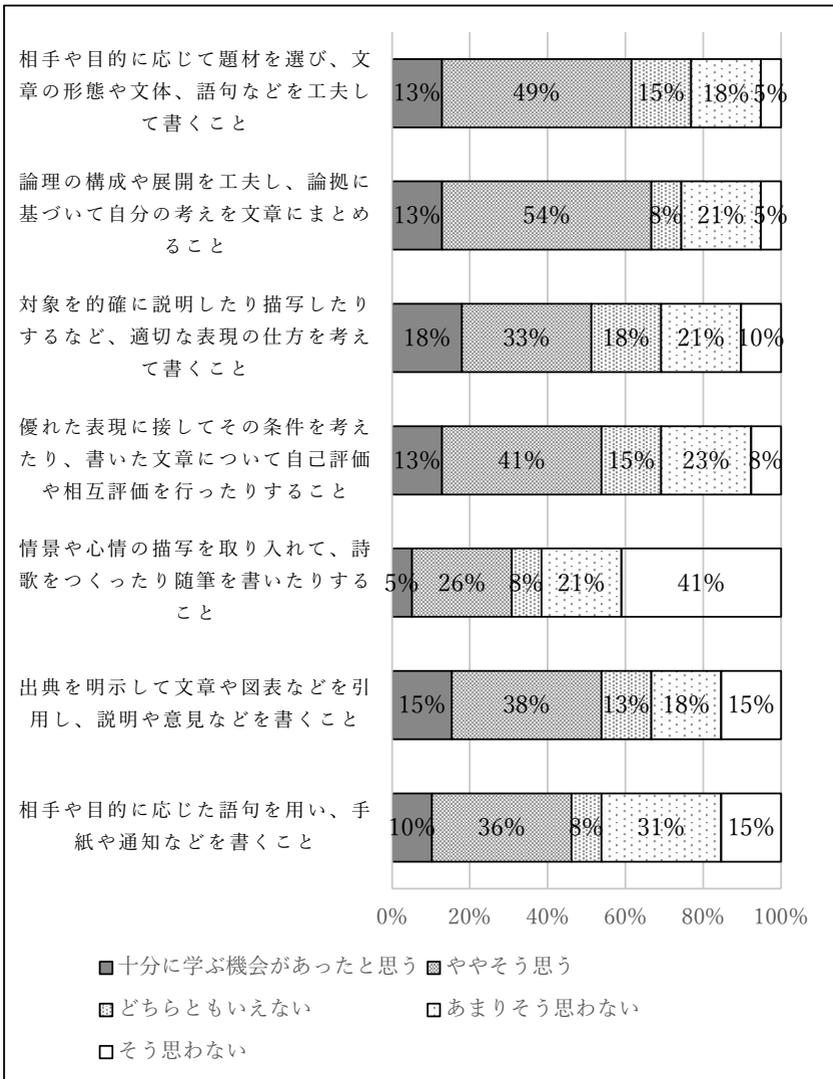


図1 高校における「書くこと」の学習経験

短大でのレポート作成につながる言語活動については、「論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること」の経験あり（「十分に学ぶ機会があったと思う」＋「ややそう思う」）が67%、「出典を明示して文

ドバックすることとした。評価後の速やかなフィードバックは学生に自身のレポートの問題点を自覚させ、改善させる効果が期待できるはずである。ループリック評価とそのフィードバックは、Microsoft Teams を利用することとした。

本研究は、以上の事情を踏まえ、短大のループリック評価を用いたアカデミック・ライティング指導について、文章表現力育成の効果を検証することを目的とする。

2. 入学前のレディネス調査

2.1 高校国語における学習履歴

短大におけるライティング指導を体系的に実施するには、学生の入学前の学習履歴を把握する必要がある。「現代文書A」の受講生は2009年告示の高等学校学習指導要領に基づく教育を受けている。この学習指導要領では「言語活動の充実」の必要性が強調されており、国語をはじめ各教科等で批評、論述、討論などの学習を充実させるよう定めている。また、2018年告示の高等学校学習指導要領においては、2019年度の高校1学年から探究活動のさらなる充実を目指して「総合的な探求の時間」が先行実施されている。これら中等教育段階での変化が学生にどのように影響しているのかを調べるため、「現代文書A」受講生39名にアンケート調査を実施した。図1は2009年告示の学習指導要領の必修科目「国語総合」における「書くこと」の内容から指導事項と言語活動例を取り上げ、学ぶ機会について調査した結果である。

〔実践報告〕

短大におけるアカデミック・ライティング指導とその効果

—ルーブリック評価活用の観点から—

勝山 博子 宮本 淳子

1. はじめに

本学日本語日本文学科（以下、「日文科」と略す）では2年間の学修の成果として卒業研究を必修とし、1万2000字以上の論文を課している。そのため、レポートや論文を作成するための文章表現力を身につけることを目的とする必修科目として、1年次前期に「現代文書A」が設けられている。

近年、大学においては初年次教育の一環としてのアカデミック・ライティング指導が行われており、それらの実践はさまざま報告されている。4年間かけて学生を教育する四年制大学と比べて、短大は2年間でディプロマ・ポリシーに示された人材を育成しなければならないため、短大独自のライティング指導の取り組みが必要となる。多様な学生が高等教育機関に進学する現在、学生たちの高校段階における論理的文章表現力修得に関する学習経験の差は、一律の指導をむずかしくしている。

一方、中央教育審議会答申「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」（2018）においては、学修者本位の教育への転換が求められており、特に「何を学び、身に付けることができたのか」という学生個々人の学習成果の可視化が求められている。学習成果の可視化については本学でもシラバスに学生へのフィードバックに関する記述を設けることが必須となっており、その必要性は十分認識されている。

これらをふまえ、筆者らの勤務校では短大の学修に直結した文章表現力の習得を目指した「現代文書A」の授業改善とテキスト作成が必要となった。2023年度は教員5名が分担して作成した教材を用いて授業を行い、そこでの課題をふまえて日文科独自のテキストを作成することとしている。

この授業は本来、1年生の担任2名がそれぞれのクラスの授業を担当することになっているが、本年度は、試行段階であることと、PC室1室に学生全員が収容可能だったことから、教員2名がTT（チームティーチング）の形式で行うこととした。また、2人の教員の評価基準を統一する方法、及び学習成果の可視化の方法として、3回のレポート課題をルーブリックにより評価し、学生にフィー

第五十七回生 卒業研究題目一覧

小野田担当

荒木優希	『ラーゲリより愛を込めて』の受容
井澤羽衣	寶石の国における色彩とストーリーの関連性
稲葉颯大	チェンソーマンの軌跡
岩崎莉奈	不登校とコミュニケーション
斉藤力	独語論
佐野愛奈	『ONE PIECE』における死
佐野真子	3人組のメリット
柴田愛未	物語における記憶喪失
杉山日向子	『うるんな客』の受容の仕方
杉山和	『性別「モナリザ」の君へ。』の性別
鈴木愛美香	コロナ禍の閉塞と心身の不調
刀根歩美	『100万回生きたねこ』の死
沼野綾里	日常会話とSNSのギャップ
原田侑奈	キャラクターの性格とコミュニケーション
真柄愛莉	ジブリの結末
松永紋実	アリスモチーフのミステリー
八木希海	嘘をつくこと
山口菜月	口癖と立場

勝山担当

青島圭那	汐見夏衛『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』論―語りに注目して―
倉内芽依	太宰治『斜陽』における女性像
迫尾実紗	江戸川乱歩『人でなしの恋』論―人形偏愛の破滅―
杉澤明莉	『ちいかわ』における試練と成長―かわいさとの関係―
高塚祐七	梶井基次郎『桜の樹の下には』論―屍体が創造するもの―
野崎茜里	太宰治『斜陽』論―貴族階級という設定―
松久保千賀	武田泰淳『審判』論―手紙の役割―
森竹悠月	芥川龍之介『蜘蛛の糸』考―許されるべき人間とは―
山本莉央	宮沢賢治『セロ弾きのゴーシュ』論―成長と音楽―
若林育実	湊かなえ『母性』論―無償の愛をめぐる―

瀬戸担当

大石真澄	ボーカロイド小説派生曲の魅力―表現と物語性―
------	------------------------

宮本担当

川田睦月
倉田優衣
栗坂佳寿莉

富士宮市の伝承
下人の行方―時代背景に沿って―
枕草子の冬の世界

浅井 ころ

デイズニー作品におけるヴィランの言語的特徴
「Disneyの本紹介における表現方法」
外国人観光客に対する「おもてなし」コミュニケーションの現状 ―日本語会話におけるハイコンテクストからローコンテクストへの変化に注目して―

菅谷朋世
杉山舞

小林多喜二『蟹工船』における表現と効果
帝の恋愛観―光源氏と比較して―
デイズニーの魅力―視覚的印象と音楽―
西野カナの歌詞からわかる彼女の女性像

池谷 悠花
飯田京佳

ハイキューの魅力―山口・月島をめぐって―

堀部小茉
森川深月

ハイキューの魅力―山口・月島をめぐって―

伊藤 翠

インクルーシブ教育におけるコミュニケーション―『聲の形』に注目して―

中野担当

赤池彩花
赤堀百音

時代による新語・流行語の特徴と変化
SNSにおける拡散されやすい文章の分析―X (旧「twitter」)における「バズり」ツイートの分析を通して―
ミステリー小説におけるフォントの役割―フォントが若年層の読者に与える印象に及ぼす影響について―

上野 蓮皇
遠藤 舞奈

位置表明を踏まえて―
価格帯の違いによる化粧品のカッチコピー―ベースメイクに注目して―
ウマ娘の心理描写が作品に与える影響―各キャラクターの関係性から―
東京デイズニーランドにおけるアナウンスの特徴

黒石 美月

フォントが若年層の読者に与える印象に及ぼす影響について―

荻 優花

東京デイズニーランドにおけるアナウンスの特徴

杉浦里奈

パブル経済期と現代における流行語の共通点

川口 礼乃

ゲーム実況におけるツツコミの機能

白井夢華

比較表現「より」「よりか」について

喜瀬川 莉桜

SEKAI NO OWARIの歌詞における表現特性

仲田瑞来

ゲーム実況のライブ配信における文末表現

近藤 花音

自閉スペクトラム症を題材とした絵本の特徴―症状の描写と読者へのメッセージを観点に―

増田 紉香

少女漫画における女性言葉の変化

鈴木 香歩

漫画『ブルーロック』におけるコーチの声掛けによる影響

望月 乃愛

少女漫画における女性言葉の変化

鈴木 香歩

漫画『ブルーロック』におけるコーチの声掛けによる影響

山崎七望

漫画のジャンル別で見る帯の情報の比較

鈴木 香歩

漫画『ブルーロック』におけるコーチの声掛けによる影響

渡邊 菜月

海外児童文学作品の日本語翻訳における表現と特徴

竹上 留奈

Jリーグにおける選手キャッチコピーの役割

塚田結麻
中野心美
松枝愛梨佳

―清水エスバルスを対象に―

櫻坂46と櫻坂46における歌詞の変化

『バムとケロ』から考えるアンコンシヤスバ
イアス

設定の細分化による共感の要因―西野カナの
ヒット曲を題材に―

雑報（令和五年度）

学科行事

☆ライブデザイン総合セミナー

・新入生歓迎会

令和五年四月七日（金） 於本学草薙キャンパス

☆ワークショップ

・本の広場

令和五年五月十三日（土） 於本学草薙キャンパス

・美術館見学「大名の名宝 永青文庫×静岡県美の狩野派」

令和五年十月二十二日（日） 於静岡県立美術館

・美術館見学「高島勲展 日本のアニメーションに遺したもの」

令和六年二月一日（木） 於静岡市美術館

☆ボランテニア

・高齢者施設「読み聞かせ・レクリエーション」

令和五年十一月二日（木）・十六日（木） 十二月二十二日（金）

於シヨートステイまごころタウン静岡

☆研究活動

・第五十七回卒業研究発表会および日本語日本文学会総会

令和六年一月十六日（火） 於本学草薙キャンパス

・十二月現在における本学科の構成は次の通り。

専任在籍教員 六名 小野田貴夫・勝山博子・瀬戸宏太・中野直樹・

巻口勇一郎・宮本淳子

在籍学生数

二年 六十六名
一年 三十七名

執筆者紹介

小野田貴夫（おのだ・たかお） 本学教員

勝山 博子（かつやま・ひろこ） 本学教員

那珂 元（なか・はじめ） 常葉大学教育学部准教授

中野 直樹（なかの・なおき） 本学教員

宮本 淳子（みやもと・じゅんこ） 本学教員

若松 大祐（わかまつ・だいすけ） 常葉大学外国語学部准教授

高田 樹（たかだ・いつき） 本学学生

沼野 綾里（ぬまの・あやり） 本学学生

編集後記

今年度も無事刊行ができました。来年度も引き続きよろしくお願い申し上げます。本号は勝山博子先生の御定年に合わせて、記念号としました。先生には、講義・学務のことだけでなく、ワークシヨップなどの引率までしていたたきました。学生をねばり強く御指導なさるお姿を拝見するたびに、自分には果たしてここまでできる日が来るのだろうかと思いましたが。少しお休みになられたあとは、また様々な御活動をなさると思います。どうかお体にお気を付けいただき、いつまでもお元気でいらしてください。そして、よろしければ御論文の投稿もお待ちしております。勝山先生、本当にありがとうございます。

先号で予告したとおり、本誌のオープンアクセス化の手続きが完了しました。国立国会図書館の御尽力もあり、今後34号までデジタルコレクションで閲覧可能になります（現時点では25号まで）。過去の論文もぜひご覧ください。35号以降は常葉大学のリポジトリから閲覧できます（刊行後五年経過した号から順次デジタルコレクションに編入していきます）。これで、創刊号から現在のものですべてウェブ上で閲覧・印刷ができるようになります。本誌がますます多くの方々を目にとまり、利用されることを願っております。

（中野 記）

題字 名誉学長 木宮乾峰

常葉国文 第三十八号

令和五年十二月三十日発行

編集兼発行

常葉大学短期大学部日本語日本文学会

会長 小野田貴夫

〒四二二-1858

静岡県静岡市駿河区弥生町六番一号

電話 〇五四(二九七)六一〇〇

e-mail onoda@tokoha-jc.ac.jp

印刷 株式会社篠原印刷所

